

期 日 二〇二四年十月十二日(土)・十三日(日)

会 場 二松学舎大学 九段キャンパス

日本中国学会
第七十六回大会要項

日本中国学会

大会参加費等のお支払いについて

今年度の大会および懇親会参加費は、郵便振替票による納入ではなく、原則としてオンライン決済のみで行います。

1. 大会参加費のお支払い方法

下記URLのリンク先より、**9月27日(金)まで**にお支払い下さい。締め切り以降にお振り込み頂いた場合、対応できない場合がございますので、ご注意ください。

大会参加費は一律2,000円です。なお、司会者・報告者におかれましても大会参加費が必要です。また、当日のお弁当につきましてもこちらからお申し込みください。領収書につきましては、システム上での発行に代えさせて頂き、原則として会場では発行いたしません。

【大会参加費お支払いURL】

https://app.payvent.net/embedded_forms/show/66bec035bf35e82738d900f8

2. 懇親会参加費のお支払い方法

懇親会費は、下記URLのリンク先よりお支払いください(大会参加とは別のQRコードです)。こちらも**9月27日(金)まで**にお手続きをお済ませください。

一般:7,000円

学生:6,000円

【懇親会参加費お支払いURL】

https://app.payvent.net/embedded_forms/show/66bec112bf35e827395646d2

【大会準備会問い合わせ先】 japansinology76@gmail.com

拝啓

時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、来る十月十二日(土)及び十三日(日)の両日で、日本中国学会第七十六回大会を二松学舎大学にて開催致します。万障お繰り合わせの上、ご参加くださいますようお願い申し上げます。

ご参加の方は、右記の案内より、二〇二四年九月二十七日(金)までに、参加費等をお振り込みください。郵政の事情のより、大会準備会の口座を開設することができませんでしたので、今回は前ページのお支払いURLのリンク先、オンライン決済によるお手続きとなります。例年と方法が異なりますのでご注意ください。

また、今年度の大会は、特別シンポジウム以外は全て対面で行います。特別シンポジウムはオンラインでも公開致します。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

敬具

二〇二四年八月二十日

日本中国学会理事長 大木 康
第七十六回大会準備会代表 牧角 悦子

会員各位

日本中国学会第七十六回大会
2024年10月12日(土)・13日(日)

日 時		行 事	会 場	
11日 (金)	13:00	理事会	1103会議室	
	15:00	評議員会・次期評議員会	1103会議室	
12日 (土)	9:00	受付開始	地下1階	
	9:30	開会式	第一会場 201教室	
	10:00 ～ 12:00	研究発表 Ⅰ. 哲学・思想部会 Ⅱ. 文学・語学部会 Ⅲ. 日本漢学部会 Ⅳ. 歴史部会	第一会場 201教室 第二会場 202教室 第三会場 401教室 第四会場 403教室	
		昼休憩 理事・各種委員会委員懇談会	13階ラウンジ	
	13:00 ～ 14:00	研究発表 Ⅰ. 哲学・思想部会 Ⅱ. 文学・語学部会 Ⅲ. 日本漢学部会 Ⅳ. 歴史部会	第一会場 201教室 第二会場 202教室 第三会場 401教室 第四会場 403教室	
	14:20 ～ 17:00	特別シンポジウム	中洲記念講堂	
	17:00	総会	中洲記念講堂	
	18:00	懇親会	13階ラウンジ	
	13日 (日)	9:30	受付開始	地下1階
		10:00 ～ 12:00	研究発表 Ⅰ. 哲学・思想部会 Ⅱ. 文学・語学部会 (A) Ⅲ. 日本漢学部会 Ⅱ. 文学・語学部会 (B)	第一会場 201教室 第二会場 202教室 第三会場 401教室 第四会場 403教室
		昼休憩		
13:00 ～ 14:00		研究発表 Ⅰ. 哲学・思想部会 Ⅱ. 文学・語学部会 (A) Ⅲ. 日本漢学部会 Ⅱ. 文学・語学部会 (B)	第一会場 201教室 第二会場 202教室 第三会場 401教室 第四会場 403教室	
14:00 ～ 16:00		書評シンポジウムⅠ ～ 書評シンポジウムⅡ 次世代シンポジウム	第一会場 201教室 第二会場 202教室 第三会場 401教室	
16:10		閉会式	第一会場 201教室	

◆特別シンポジウムのオンライン視聴URLについては、学会HPにてご案内する予定です。

◆大会本部

402教室（学会事務局）

◆休憩室

13階ラウンジ

地下1階食堂（13日のみ）

◆子供用休憩室（保護者同伴）

13階来賓室

◆当日受付／クローク

受 付 地下1階

クローク 地下2階

※12日（土）の荷物預かりは、午後6時で終了致します。総会の後
にお引き取りをお願い致します。

◆書店・出版社展示 地下2階 中洲記念講堂周辺



二松学舎大学

日本中国学会第七十六回大会プログラム

I 哲学・思想部会（第一会場 二〇一教室）

十月十二日（土）午前

I-1 孔子新制と先王の礼——何休と鄭玄の「『春秋』制」に対する議論について（十時～十時三十分）

程 雪茹（東京大学大学院）

司会 佐川 繭子（國學院大學）

I-2 范曄『後漢書』王符伝引『潜夫論』の筆削から見る普遍性への希求（十時三十分～十一時）

長谷川 隆一（早稲田大学）

司会 古勝 隆一（京都大学）

I-3 元弘相伝本『五行大義』本文引『淮南子』考（十一時～十一時三十分）

路 勝楠（北海道大学大学院）

司会 内山 直樹（千葉大学）

I-4 『管子注』の作者と伝承状況について

——杜佑『通典』の記述を手がかりに（十一時三十分～十二時）

有永 真瑞（二松学舎大学大学院）

司会 内山 直樹（千葉大学）

十月十二日(土) 午後

I—5 元行沖の学術について——「釈疑」を端緒として(十二時～十二時三十分)

名越 健人(國學院大學大学院)

司会 橋本 秀美(二松学舎大学)

I—6 王安石性説再考——「不顕」をめぐる思想を端緒として(十三時三十分～十四時)

梶田 祥嗣(流通経済大学)

司会 田中 正樹(二松学舎大学)

十月十三日(日) 午前

I—7 胡瑗の思想——『中庸義』の検討を中心として(十時～十時三十分)

大森 幹太(二松学舎大学大学院)

司会 福谷 彬(京都大学)

I—8 正徳前半期における王陽明とその対話者達——心即理から致良知への道程(十一時三十分～十二時)

費 康幸(東北大学大学院)

司会 鶴成 久章(福岡教育大学)

I—9 王安石『詩義』再考(十一時～十一時三十分)

井澤 耕一(茨城大学)

司会 種村 和史(慶應義塾大学)

I—10 江右陽明学者と「石屋山人」彭簪（十時三十分～十一時）

劉 心奕（東洋大学大学院満期退学）

司会 三浦 秀一（東北大学名誉教授）

十月十三日（日）午後

I—11 万暦期の知識人と仏道両教——屠隆の前半生（一五四三～一五八七）をめぐって（十三時～十三時三十分）

丁 欽馨（東北大学大学院）

司会 早坂 俊廣（信州大学）

I—12 黄遵憲の歴史観における「変易」と「進歩」——「勢」の思想として扱われるか（十三時三十分～十四時）

蘇 文博（総合研究大学院大学）

司会 高柳 信夫（学習院大学）

書評シンポジウムI 松野敏之著『朱熹「小学」研究』（十四時～十六時）

○三浦 秀一（東北大学名誉教授）

松野 敏之（国士舘大学）

新田 元規（徳島大学）

梅村 尚樹（北海道大学）

佐野 大介（名古屋大学）

Ⅱ 文学・語学部会（第二会場 二〇二教室）

十月十二日（土）午前

Ⅱ―1 「清」でイメージされた空間とその奥底——「上巳」の詩を軸として（十時～十時三十分）

李 墨宇（雲南大学）

司会 齋藤 希史（東京大学）

Ⅱ―2 袁昂「古今書評」の方法（十時三十分～十一時）

仲村 康太郎（京都大学大学院）

司会 齋藤 希史（東京大学）

Ⅱ―3 両漢時代の紀行賦にみられる構造変化——故事と風物の関係を中心に（十一時～十一時三十分）

榊原 慎二（東北大学大学院）

司会 谷口 洋（東京大学）

Ⅱ―4 「洛陽紙貴」考——史書の編纂における修辞性について（十一時三十分～十二時）

楊 春雨（広島大学大学院）

司会 谷口 洋（東京大学）

十月十二日（土）午後

II—5 袁宗道の会試及び閣試の答案に対する王錫爵の評価と公安派の原点（十三時～十三時三十分）

和泉 ひとみ（関西大学）

司会 三浦 秀一（東北大学名誉教授）

II—6 貞元年間における宮廷詩会——徳宗皇帝の五言古詩創作とその意義を中心に（十三時三十分～十四時）

李 恒（神戸大学大学院）

司会 大橋 賢一（北海道教育大学）

十月十三日（日）午前

II—7 李開先の『悼亡同情集』にみる明人亡妻哀悼の心性（十一時～十一時三十分）

野村 鮎子（奈良女子大学）

司会 大木 康（東京大学名誉教授）

II—8 「清溪道人」方汝浩について——『禪真逸史』をめぐる問題点（十一時三十分～十二時）

表野 和江（鶴見大学）

司会 金 文京（京都大学名誉教授）

十月十三日(日)午後

Ⅱ―9 隋唐『詩』学の一側面——劉迅「説詩三千言」を手掛かりとして(十三時―十三時三十分)

高崎 駿士(東北大学大学院)

司会 牧角 悦子(二松学舎大学)

Ⅱ―10 張恨水「平滬通車」「蜀道難」における女性と移動の表象をめぐって(十二時三十分―十四時)

神谷 まり子(日本大学)

司会 池田 智恵(関西大学)

書評シンポジウムⅡ

加納留美子著『蘇軾詩論』(十四時―十六時)

○佐野 誠子(名古屋大学)

加納 留美子(相模女子大学)

小笠原 淳(熊本学園大学)

陳 佑真(都留文科大学)

原田 愛(金沢大学)

Ⅲ 日本漢学部会 (第三会場 四〇一教室)

十月十二日 (土) 午前

Ⅲ―1 義堂周信と偈頌の総集「貞和集」について (十時～十時三十分)

太田 亨 (広島大学)

司会 堀川 貴司 (慶應義塾大学)

Ⅲ―2 『江湖集夾山鈔』所引の江西龍派「統翠抄」における「句面」と「句中」(十時三十分～十一時)

武 清陽 (京都大学大学院)

司会 堀川 貴司 (慶應義塾大学)

Ⅲ―3 『四河入海』における林希逸『虜齋口義』の受容 (十一時～十一時三十分)

瀧 康秀 (清泉女学院高等学校)

司会 水上 雅晴 (中央大学)

Ⅲ―4 伊藤仁斎『春秋』観の再考察

——『春秋経伝通解』における中国『春秋』説の受容を手がかりに (十一時三十分～十二時)

于 昊甬 (東京大学大学院)

司会 水上 雅晴 (中央大学)

十月十二日(土) 午後

Ⅲ―5 清儒呉英の徂徠学受容——『論語』の「舜禹之有天下」章を中心に(十三時～十三時三十分)

蒋 薰誼(東京大学)

司会 吾妻 重二(関西大学)

Ⅲ―6 「徂徠山人外集」とその漢籍版本について(十三時三十分～十四時)

堀尾 裕真(名古屋大学大学院)

司会 吾妻 重二(関西大学)

十月十三日(日) 午前

Ⅲ―7 山本北山の『尚書』学——『古文尚書勤王師』を中心に(十一時三十分～十二時)

湯 青妹(九州大学大学院)

司会 橋本 秀美(二松学舎大学)

十月十三日(日) 午後

Ⅲ―8 江戸時代における蘇軾の史論の争い——漢文伝播の二つのメカニズムについての考察(十三時～十三時三十分)

謝 文君(北京大学中国古文文献研究中心)

司会 合山 林太郎(慶應義塾大学)

Ⅲ—9 日本近代の填詞作品にみえる「稼軒体」について（十三時三十分～十四時）

王 書凝（関西大学大学院）

司会 合山 林太郎（慶應義塾大学）

次世代シンポジウム（十四時～十六時）

近代日本における漢学をめぐる諸問題

○町 泉寿郎（二松学舎大学）

川邊 雄大（日本文化大学）

佐川 繭子（國學院大學）

武田 祐樹（二松学舎大学）

辻井 義輝（東洋大学東洋学研究所）

杜 軼文（横浜市立大学）

Ⅳ 歴史部会（第四会場 四〇三教室）

十月十二日（土）午前 歴史部会

Ⅳ—1 望山ト笠祭袴簡の祭祀体系——包山ト笠祭袴簡と比較して（十時～十時三十分）

趙 珊（北海道大学大学院）

司会 名和 敏光（山梨県立大学）

IV-2 随州孔家坡漢簡『日書』における数術家的特徴について（十時三十分～十一時）

何 松延（北海道大学大学院）

司会 名和 敏光（山梨県立大学）

IV-3 「若魂氣則無不之也」再考——故事受容の一例として（十一時～十一時三十分）

三木 啓介（二松学舎大学大学院修了）

司会 池田 恭哉（京都大学）

IV-4 明末清初に語られた宋の遺民——『宋遺民広録』の再発見と研究（十一時三十分～十二時）

顧 嘉晨（東京大学大学院）

司会 早坂 俊廣（信州大学）

十月十二日（土）午後

IV-5 劉宋の貴族制と五等爵（十三時～十三時三十分）

渡邊 義浩（早稲田大学）

司会 牧角 悦子（二松学舎大学）

IV-6 「世界人權宣言」における良知（十三時三十分～十四時）

小島 毅（東京大学）

司会 伊東 貴之（国際日本文化研究センター）

Ⅱ 文学・語学部会 (B) (第四会場 四〇三教室)

十月十三日 (日) 午前

Ⅱ—11 『一切経音義』における「通語」(十時～十時三十分)

李 乃琦 (名古屋大学)

司会 竹越 孝 (神戸市外国語大学)

Ⅱ—12 江戸時代における『日本風土記』の伝写と解説——日本語彙の漢語音訳を中心に(十時三十分～十一時)

孫 楊洋 (京都大学大学院)

司会 竹越 孝 (神戸市外国語大学)

Ⅱ—13 田漢の創作理念の形成における大正文壇からの影響——「靈光」を中心に(十一時～十一時三十分)

閻 瑜 (お茶の水女子大学)

司会 田村 容子 (北海道大学)

Ⅱ—14 逸脱への憧憬——『臥虎藏龍』にみえる俠女の抵抗(十一時三十分～十二時)

孫 楚珮 (神戸大学大学院)

司会 星野 幸代 (名古屋大学)

十月十三日(日)午後

II-15 1938年武漢文壇「旧形式利用」論争から見る日中左翼文学交流(十三時〜十三時三十分)

胡勝(名古屋大学大学院)

司会 鈴木 将久(東京大学)

II-16 近代日本知識人の燈謎へのまなざし——一九二〇年代を中心に(十三時三十分〜十四時)

吳修喆(九州大学)

司会 鈴木 将久(東京大学)

V 特別シンポジウム(中洲記念講堂)

十月十二日(土)午後 (十四時二十分〜十七時)

「古典学の方法論」

趣旨説明 牧角 悦子(二松学舎大学)

講師 納富 信留(東京大学)

講師 江藤 裕之(東北大学)

コメンテーター 小島 毅(東京大学)

司会 橋本 秀美(二松学舎大学)

要旨

特別シンポジウム「古典学の方法論」

人文学が学術の中心だという認識が揺らいでいる。利益追求や成果主義が学術界にも浸潤してきて久しい。公的な補助金を獲得するために、即席の目に見える効果を求め続けること、目に見えない真理への憧憬を軽んじること、そこからは自立した学問や文芸は育たないのではないかという危惧に駆られる。

古典は、しかしそれでも残り続け、読み継がれ、学術の対象となり続けるだろう。古典の古典たる所以は、目先の価値とは異次元のものだからだ。そして同時に、だからこそ古典へのアプローチは人文学の質につながる。安易な方法論からは安易な結論しか生まれない。

中国学は、古典において大きな資源を持っている。ただ、古典学の成熟には時間がかかる。目に見える効果を求めにくいものであるがゆえに、研究者人口も激減している。

そこで今回は、中国学とは異なる分野で、古典学を独自の方法論で確立することに成功しているお二人の講師をお呼びして、それぞれの古典学の方法論と視点などについてお話していただくことにした。専門とする言語や領域を異にしても、古典学に向き合うという意味では同質の困難あるいは魅惑があるはずである。この利慾紛擾の世の中で、人文学が生きて残るために、古典学へのより有効なアプローチを共に考えてみたいと思う。

パネリスト・演題

趣旨 説明 牧角悦子（二松学舎大学）

講演 Ⅰ 納富信留（東京大学）

講演 Ⅱ 江藤裕之（東北大学）

コメンテーター 小島 毅（東京大学）

司 会 橋本秀美（二松学舎大学）

「西洋古典文献学とは何か？ 理念・実践と諸問題」

「ことば・人間・文化の学東西比較―国学と文献学の方法論について―」

パネルⅠ・松野敏之著『朱熹『小学』研究』（汲古書院、二〇二二年九月刊行、三二五頁）

『小学』は、近世東アジア地域で広く読まれた書であったが、近代以降の研究ではあまり注目されない。その原因は主に二つ。朱熹が編纂者ではないという見解が一般化したことと、内容が経書等からの引用に過ぎないとみられたことである。本書では次のような検討を行った。

〔第一章〕朱熹と劉清之の書簡を再検討し、現行本『小学』は朱熹の編纂書であると結論付けた。その過程で、朱熹と劉清之には編纂の傾向に違いがあることを確認。原典そのままに引用する劉清之に対し、朱熹は経書であっても修訂を加えていた。

〔第二章〕朱熹の編纂傾向をふまえ、『小学』の文章と原典をすべて調査すると、多くの文章に修訂の跡が確認できた。時代に合わなくなった古札や小学として学ぶには不適切な話などが刪去されていた。

〔第三章〕『小学』には朱熹の思想が反映され、日常的な孝の話が多い。中には従来の小学教育の書では採りあげられなかった「父母への諫め」という話題もある。そこでは言葉遣いや表情・態度に気を遣うことが示されていた。

〔第四章〕朝廷が旌表する孝と『小学』の孝の違いについて検討。割股のような極端な孝行為や漢唐で語られた孝感譚などを朱熹は教えとするつもりはなく、『小学』にも収めていない。『小学』では「孝」が日常道徳として位置づけられている。

〔第五章〕「敬」は朱熹が提唱した重要な学問論である。『小学』は「孝」の具体的な方法を示すと共に、経書に見える聖賢の教えと「敬」を結びつけるという重要な役割を担っている。

〔第六章〕朱熹没後、南宋から清末に至るまでの『小学』の受容を概観。特に明中後期から清初にかけて、『小学』は科挙との関連から廃れていった。

〔終章〕朱熹が生涯にわたり様々な小学教育を模索していたことを整理。『小学』は朱熹の小学教育における集大成となる。

以上の通り、『小学』は朱熹の意図に基づき、入念な配慮のもとに編纂された書であることを論じた。

目次

- 序章／第一章 朱熹小学書と劉清之小学書／第二章 『小学』編纂／第三章 『小学』における孝
第四章 孝行譚の選択／第五章 敬身篇の編纂／第六章 元明清時代の『小学』／終章 朱熹と小学教育

パネリスト

評者：梅村 尚樹（北海道大学。科挙・学校からみる宋代士大夫社会と思想）

佐野 大介（名古屋大学。日中における孝思想及び孝子顕彰）

新田 元規（徳島大学。中国明清代の経学史。明清交替期の礼学を中心とする）

著者：松野 敏之（国士舘大学）

司会：三浦 秀一（東北大学名誉教授）

パネルⅡ・加納留美子著『蘇軾詩論』（研文出版、二〇二二年十月、三四〇頁）

本書は、北宋の蘇軾（一〇三七—一一〇一）の詩文にみられる独自の反復性に着目し、その創作意図を論究したものである。

蘇軾は官途にあつて、(一)政治的対立に直面し、(二)政争を避けて地方官を歴任し、(三)罪臣として左遷され、(四)名誉回復を果たすという展開を二度経験した。興味深いことに、その経歴と呼応するように、蘇軾の詩文には過去に詠んだ自作の表現や着想、構成を踏襲して新たに作成するという手法が度々確認される。本書ではこの手法を蘇軾の「自作参照」と称し、後半生の詩を中心に、六章に亘って論じた。

序章にて蘇軾作品の「自作参照」の概要と分類を行い、第一章で「自作参照」の起点となった徐州知事時代に着目し、「吾生如寄耳」等を例に、現地での経験が後半生の創作に与えた影響を考察した。第二章から第五章では、個別に主題を設定し、「自作参照」によって形成された作品群を検討した。そこには、弟蘇轍と唱和した「夜雨对牀」詩や左遷先の梅花に寄せた詠梅詩、嶺南の山を称揚した羅浮山詩が含まれる。そして第六章では、「自作参照」が殆ど用いられなかった海南時代の作品に注目し、「欠月」という詩語に象徴される詩人としての新たな境地を指摘した。

蘇軾にとって「自作参照」とは、博覧強記を誇る手段ではなく、浮沈激しい官僚人生の中で編み出された一種の戦略であった。すなわち、過去の相似た状況下で作られた自作を引用しつつ、現在の困難な状況を肯定的に描き、もって今後の好転を期待するという言祝ぎの役割が期されたのである。

パネリスト

評者…小笠原 淳（熊本学園大学）

陳 佑真（都留文科大学）

原田 愛（金沢大学）

著者…加納留美子（相模女子大学）

司会…佐野 誠子（名古屋大学）

近代日本における漢学をめぐる諸問題

司会：町 泉寿郎（二松学舎大学）

報告者：杜 軼文（横浜市立大学）

武田 祐樹（二松学舎大学）

佐川 繭子（國學院大學）

辻井 義輝（東洋大学東洋学研究所）

川邊 雄大（日本文化大学）

日本漢学は今世紀に入ってその研究が飛躍的に発展した分野である。本シンポジウムでは、今後の発展が期待される近代以降に注目し、五人の報告者によって、「文学史」や漢学と史学の関係など学術概念に関する問題、漢文訓読や漢文教育に関する問題、地方漢詩人の漢詩や宮内省御用掛による誄・墓誌など漢詩文創作の問題などを取り上げ、近代漢学をめぐるさまざまな問題について紹介し検討する機会としたい。各演者の報告概要は次のとおりである。

漢学と明治知識人の「文学」「文学史」概念の受容について

杜 軼文（横浜市立大学）

近年、「文学」をはじめ「文学史」など近代の学術概念に対する再評価が文学研究の分野で始まっている。ここでは、「文化交渉」を視座とし、明治期に編纂された「中国文学史」に焦点を当てて、従来の学問である漢学の学識を身につけた明治知識人における「文学」「文学史」という近代的学術概念に対する受容の軌跡について考えたい。

川田甕江と歴史学―玉島図書館所蔵資料を中心に―

武田 祐樹（二松学舎大学）

倉敷市立玉島図書館甕江文庫には川田甕江（一八三〇～一八九六）関係資料が二〇〇〇点ほど伝わるが、従来、有効に活用されて来なかった。

今回、その中からいくつかの資料を紹介しつつ、「川田薨江と歴史学」という史学史上しばしば言及されながらも、具体的な資料に基づく議論の
不十分な問題について、簡潔に論じたい。

明治期における「漢文教授」をめぐって

佐川 繭子（國學院大學）

明治末年に発表された「漢文教授ニ関スル調査報告（文部省）」（『官報』第八六三〇号彙報）は、現在に至っても漢文訓読法の拠り所となっている。それでは、明治期の「漢文教授」とはどのようなものであったのだろうか。今回の報告では、訓読と同時代の書き言葉との関係、教授・学習の場等について考えてみたい。

忘れられた漢詩人千葉昌胤の文学的特質

辻井 義輝（東洋大学東洋学研究所）

発表者は、近年、千葉県における漢学の普及展開を包括的に調査している。この過程で、旧市原郡に生まれ、二松学舎出身で、明治から大正初期にかけて文学的に高い評価を受けていた漢詩人千葉昌胤（一八六六―一九一八）を発見した。この者は優れた人物でありながら、従来の先行研究から全く忘れられてきた。このたびはこの人物の漢詩文の特質を論じたい。

戦前・戦中期の宮内省御用掛について―誄および墓誌の撰文を中心に―

川邊 雄大（日本文化大学）

戦前・戦中期に宮内省御用掛をつとめた漢学者、西村時彦（号天囚、一八六五―一九二四）・吉田増蔵（号学軒、一八六六―一九四二）・加藤虎之亮（号天淵、一八七九―一九五八）の旧蔵資料等を用いて、誄・墓誌の撰文の過程について明らかにするとともに、各人の撰文に対する考え方について考察する。

発表要旨

I—1 孔子新制と先王の礼——何休と鄭玄の「春秋」制」に対する議論について

程 雪茹（東京大学大学院）

漢代経学史における今古文の対立と今古文学の盛衰は、両漢の学術に関する最も重要な問題であると言っても過言ではない。前漢の劉歆と太常博士との論争を始めとして、両漢にわたって行われた四度の今古文論争を通じて、官学であった今文学が衰退し、代わりに古文学が台頭した。これらの全て『春秋』学と関わる今古文論争は、何休（一一九—一八二）と鄭玄（一二七—二〇〇）の『春秋左氏伝』『春秋公羊伝』『春秋穀梁伝』をめぐる批判の応酬に極まると言えよう。その結果は、『後漢書』によれば、何休が自説の欠点を認識し、また、論争が終わった後「古学が遂に興る」と范曄は述べた。

先行研究によれば、鄭玄は公羊学説を攻撃することに主眼があつたのではなく、公羊説を墨守して左氏・穀梁説を一切認めようとなし、何休の学問態度を批判している。しかし、そうであるとすれば、『春秋』三「伝」の相違する内容について、何休と鄭玄の解釈の根本的な違いは何であるのか。

この問題を解明するために、本稿では輯佚された何休の『公羊墨守』『左氏膏肓』『穀梁廢疾』と鄭玄の『箴膏肓』『發墨守』『起廢疾』を用いて、彼らの『春秋』の礼についての議論を考察する。具体的には、まず何休と鄭玄における「『春秋』制」の定義に着目し、彼らが「『春秋』制」と前代の礼制との関係性をどのように捉え、「聖王制礼（聖王が礼を作る）」という視点から「『春秋』制」をどのように歴史的に位置付けたのかを解明する。次に、「『春秋』制」の中で特異性を持つ魯礼を具体例にして、何休と鄭玄の「魯郊」に対する異なる解釈を説明した上で、彼らの魯礼と王の礼との関係性に対する認識を明らかにする。最後に、「聖人」と「經典」という二つの視点から、何休と鄭玄において「『春秋』制」に対する解釈の相違が生じる原因を検討する。

I—2 范曄『後漢書』王符伝引『潜夫論』の筆削から見る普遍性への希求

長谷川 隆一（早稲田大学）

范曄は南朝宋（劉宋）に生きた人である。彼の編纂した『後漢書』は、現在に至るまで、後漢史研究の第一級史料とされている。ただし、すでに多くの先学が指摘しているように、范曄『後漢書』から再構成される後漢時代は、あくまで范曄がそう考えた虚像であることに注意する必要がある。また、皇帝や外戚のあり方などについて、実は范曄の考え方や彼の生きた現実が反映されていることも、いくつかの先学により指摘済みである。

今回は、范曄の考えた後漢時代史は如何なるものだったのか？という従来の観点はひとまず措き、彼が『後漢書』を編纂するに当たって行った資料的作為——筆削——の目的について、范曄『後漢書』王符伝引『潜夫論』を題材として探っていききたい。范曄『後漢書』王符伝（正式には王充王符仲長統列伝）には、王符『潜夫論』の数篇が引用されている。これらを現行の王符『潜夫論』と比較すると、異なる箇所が多く、范曄の筆削が加えられているのが明白である。范曄が見た『潜夫論』がそうなっていたのだという批判もあるかも知れないが、その蓋然性は低い。『群書治要』引王符『潜夫論』が、現行の王符『潜夫論』とほぼ一致するためである。ゆえに、范曄による筆削があったと判断してよい。

今回の報告は、まず范曄『後漢書』王符伝引『潜夫論』と現行王符『潜夫論』を比較し、その「具体的事例をできる限り排除し、汎時代的に通ずる普遍的な論にする」という筆削の特徴を明らかにする。次に、范曄の「論」観を、劉勰『文心雕龍』に見える「諸子」観・「論」観と比較し、范曄の「論」観を明確にする。最後に、范曄は汎時代的、普遍的な「論」を通して何を伝えたのかを見ていきたい。

I-3 元弘相伝本『五行大義』本文引『淮南子』考

路 勝楠(北海道大学大学院)

本発表は、中国で早く散佚するも日本に伝存していた『五行大義』の最古の完全な鈔本である元弘相伝本(以下『五行大義』と称す)における『淮南子』に関する記述に注目して考察し、その全体像を総合的に解明することを目的とする。

『五行大義』は、隋代までの陰陽五行説を網羅した貴重な資料であり、多くの文献を引用している。元弘相伝本『五行大義』の注釈(頭注・脚注・背記注)には鎌倉時代の注釈も含まれており、多数の漢籍が引用され、それを検討すれば日本の漢籍受容史にも重要な示唆を与える。今回の発表では、『五行大義』本文における『淮南子』の引用に焦点を絞り、今後の本文の淮南子注および注釈における『淮南子』・淮南子注引用研究の基礎となる内容を提示したい。

「淮南」・「淮南子」などをキーワードとして抽出した内容に基づき、『淮南子』の引用と考えられる部分を選別し、形式と内容の面に対して比較・分析を行う。

形式の面では、『五行大義』における『淮南子』の引用は、巻一の論干支名と巻四の論律呂に集中している、引用形式はほとんどが「淮南子云」であり、「淮南子曰」・「淮南子天文篇云」・「淮南子及文子並云」といった特異な形式もわずかに見られる、巻一・巻四に集中している引用は『三礼義宗』とセットで現れ、『淮南子』は「天文訓」に集中しているなどの特徴がある。内容の面では、現行本『淮南子』と比較・分析した結果、引用内容は『淮南子』の記述そのままではなく、蕭吉自身の添削が加えられている、『淮南子』本文の引用ではないが、「淮南子云」として、注文が記述されているものがある。

以上に基づき、『淮南子』の『五行大義』における位置づけ・引用の特徴を考察し、その全体像を明らかにするとともに、さらに許慎注が引用されていること、『五行大義』が未定稿の性質を持つことを検証したい。

I-4 『管子注』の作者と伝承状況について——杜佑『通典』の記述を手がかりに

有永 真瑞（二松学舎大学大学院）

現在、我々が見ることのできる最古の『管子』版本は、南宋初頃に成立したと考えられる「楊忱本」であるが、この版本を含め、現存する全ての系統の『管子』版本には房玄齡による注釈が附されている。しかし、この注の作者が実際には房玄齡ではなく、尹知章なる人物であるとの指摘は、早くは『郡齋讀書志』に見え、『文献通考』や『四庫提要』などでも踏襲されたことで定説として受け入れられてきた。

この『管子注』については、内容が浅薄で文意が通じないことも多いことから、清朝考証学者による『管子』校訂の際、『管子』本文から切り離されて理解されたため、『管子注』自体の成り立ちや施注の状況などについての整理は、総合的には未だ為されていないのが現状である。

また、現行本『管子』二十四巻のうち、十九巻以降についての『管子注』は北宋頃までには既に失われていたらしく、この六巻分の中には、わずかな注釈が見られるばかりである。この『管子注』のわずかな残存については、その全てが杜佑『通典』の『管子』引用箇所と重なる。そのため、先行研究では『通典』に引用されていた『管子注』が『管子』本体に移入したと考えるものと、『通典』の『管子』引用部の記述は杜佑の自注であり、それが『管子』本体に移入したとする両説が存在する。これは『管子注』の成り立ちや性質を考察する上で重要なテーマであるものの、『管子』研究史上において、この十九巻以降の注の作者や成立過程についての考察は、論者によってその認識が入り乱れ、体系的な理解が為されているとは言い難い。

よって本発表では、『管子注』が成立したと思われる初唐から、南宋初「楊忱本」までの『管子注』にまつわる伝承状況の時系列と残存状況を体系的に検証した上で、『通典』の『管子』引用個所の注釈と「楊忱本」の施注の具体例を比較することで、その内容の差異についてより深く考察したい。

I—5 元行沖の學術について——「釈疑」を端緒として

名越 健人（國學院大學大学院）

唐代前期の學術をめぐって、特に玄宗の開元年間に多様な學術文化事業が手掛けられたことに注目し、「新文化」の存在が指摘されている（喬秀岩氏等『孝經述義復元研究』編後記（崇文書局、二〇一六年））。これは宋代へと展開する學術が形成される唐代後期と六朝期との間に挟まれた、唐代前期の學術の独自性を示す指摘である。この「新文化」の様相を考える上で、『御注孝經』の制作に参画した元行沖（六五三—七二九）の學術を検討することは、有意義なはずである。

元行沖の學術を検討する基本的資料として、『新唐書』・『旧唐書』本伝に収録される「釈疑」が存在する。「釈義」の趣旨は、『類礼』義疏を上奏するも、学官に立てられなかったことから、元行沖が「章句の学」を変易することの困難を説いた点にある。先行研究は彼の「章句の学」の否定を中唐經学の新傾向の先駆と位置けるものが多く、前時代の學術との連続性や同時代的意義の検証が閑却されてきた傾向にある。また、当時の礼学の動向と「釈疑」を検討した吉川忠夫氏の研究も存在するが、より他の事象も含めて検討すべきである。

本報告では、先学の指摘を踏まえて、より彼を取り巻く學術環境に着目して考察することとしたい。玄宗の命で元行沖を主導的立場に置いて、学士を集めて行われた図書蒐集・校書事業の成果である『群書四録』は、二〇〇卷に及ぶ大規模なものであった。そこで、元行沖の學術を支えた背景として、その様相を明らかにし、「釈疑」との関係について言及する。また、「釈疑」に見受けられる「章句の学」の否定や、鄭玄説を反駁する經学的立場、延いては「異義を究覽」し、選択を求める学問態度が友人であった劉知幾にも共通していることを詳説する。加えてそれらは、隋代の王劭・顔之推等の學術の影響下にあったことも確認する。以上の「釈疑」を端緒とした元行沖の學術への考察を通して、唐代前期の學術の様相の一端を探りたい。

I—6 王安石性説再考——「不顯」をめぐる思想を端緒として

梶田 祥嗣(流通経済大学)

王安石(一〇二一—一〇八六)が修撰を司ったいわゆる『三経義』は、それ以前の主流であった孔穎達『五経正義』に対し、「新義」と呼ばれる新たな注釈を打ち出したことで知られる。例えば、『詩経』大雅・文王之什・文王にある「有周不顯」の「不顯」について、『毛詩正義』では「不」は「丕」に通ずるため、文王の徳が大いに輝くという意に取るが、『詩義』ではそれを真つ向から否定し、文王の徳は純粹で露見するものではないため、文字通り「顯れない」意であると、通説とは全く逆の解釈を提示した。文王の聖徳は衆人には不可知であるとの注釈はこれ以外にも複数の箇所を確認され、また湯王の徳についても文王と同方向の解釈が採られる。ただ、なぜ「不顯」であるのか、その根拠は明確に示されていない。そのため、先行研究においても特段着目されることなく、現在に至る。もっとも、この聖王の特質を示す「不顯」の語は、王雱や呂惠卿、林自、陳祥道らによる王安石門下の老莊注において散見され、そこでもやはり聖人の徳について言われる。興味深いことに、その「不顯」を説く文脈では、同時に「性」について言及されることが多く、ここでの性説は聖人が体得するような性本来の在り方が説かれている。

従来、王安石の性説は孟子の性善説を採らないかたちで性善を言う、あるいは性無善悪を説くなど、性説にゆらぎがあるとみられてきた。また、年代ごとに性説が変化したのだという変遷説も根強く、総じて未だ定論を見ない。発表者の見立てでは、このような王安石の性説における種の齟齬は、「不顯」として形容されるような聖人の性と中人(衆人)の性というように、対象を分けていることによって生じるのであって、決して矛盾しているのではないと考える。そこで発表では、王安石による性の二層の解釈について、その考察範囲を王学系老莊注にまで拡大し、仮説の検証を試みたい。

I—7 胡瑗の思想——『中庸義』の検討を中心として

大森 幹太(二松学舎大学大学院)

道学の形成史を考察する上で、北宋の慶暦年間(一〇四一—四八年)が、漢唐注疏学に対して新たな經典解釈に向かう転換期であることは、古くより指摘されてきた。しかし、その思想史的基盤の実態解明には、検討の余地が多分に残されている。

本発表は、このような視点の下、慶暦年間を主な活動期とした士大夫・胡瑗(九九三—一〇五九)の思想について検討するものである。

胡瑗は「宋初の三先生」の一人として、後に北宋道学が勃興する先駆的存在とみなされている。従来、胡瑗の思想研究に関しては、彼の弟子が記録した『周易口義』『洪範口義』『洪範口義』を中心に検討がなされてきた。その中で、後の程頤『易伝』等と比べ萌芽的ではあるものの、漢唐注疏学に批判的な独自の經典解釈を展開したことが、胡瑗思想の特色として論じられてきた。

本発表では、こうした先行研究の成果を踏まえ、道学形成史上における胡瑗の位置づけを改めて検証したい。

その際、本邦では未だ言及がなされていない、胡瑗『中庸義』を新たな検討材料に加える。この『中庸義』は単行本としては散佚しているが、南宋の衛湜『礼記集説』一六〇卷に「海陵胡氏」説として分散的に収載される。

そこでまず、『周易口義』『洪範口義』における『中庸』の引用部分と、その引用部分に該当する『中庸義』の注釈を突き合わせ比較する。これにより、『礼記集説』に散在する『中庸義』の資料的位置づけを確認したい。その上で、胡瑗の『中庸』注釈に見える人間観、実践工夫論を窺う。すなわち、『中庸』冒頭の「天命之謂性」注解をはじめとした「性」説の展開、「誠」の実践を中心に説かれる対象(「物」との関係、「洪範」思想と「中庸」概念との連関性、といった諸問題について検討する。そして、『中庸』解釈に窺える胡瑗の思想について、道学を基軸に考察した場合に如何なる思想史的基盤が見出せるか、道学形成史における胡瑗思想の新たな位置づけを試みたい。

I—8 正徳前半期における王陽明とその對話者達——心即理から致良知への道程

費 康幸（東北大学大学院）

王陽明（一四七二—一五二九）は、正徳三年（一五〇八）、貴州龍場へ配流され、そこで大悟に辿りついたことで、心即理という思想的核心を確立した。その後、北京と南京に在住していた時に唱えられた教説は、この大悟によって切り開かれた学問の新たな地平を、時を経るごとにより緻密に表現していったものであった。そして、江西において数年間の激務をこなしていくなかで、同十五年に良知説が提唱されたことで、成熟の段階に到達していくのである。

本発表は、龍場の大悟から致良知説の登場までの間、すなわち王陽明が貴州から北京を経て南京に至るまでの時期を考察の対象として、王陽明が諸々の人士と交流したことで生じた思想交渉の内実を把握せんとするものである。具体的には、貴州提学官として王陽明を文明書院の主教に招聘した席書（一四六七—一五二七）、そして修学時代より交流のあった汪俊（一四六八—一五二九）をはじめとした人士達に注目する。彼らは形骸化した国家教学に各種の疑問を呈していた人々である。王陽明は貴州および北京に滞在していた当時、朱陸論や体用論をめぐって彼らと議論を交わしており、その内容の一部は『朱子晚年定論』など後の著作にも引き継がれるものである。続く南京在任時において王陽明が誠意を『大学』の枢要と位置づけ、自らの思想をひとまず誠意説として収斂させたことに、この時期の議論がどのような影響を与えたのかについて考察を及ぼす。

これにより王陽明の思想を単に個人の内面の産物としてではなく、当時の思想界において様々な立場にあった人々との對話によって生じた相互作用の結果として動態的に考えることが可能となる。このような考察は、王陽明を取り巻いていた明代正徳前半期の思想状況、並びに王陽明思想の同時代的位置を探究する端緒ともなろう。

我々が『詩』を解釈する際、その真意を解き明かしているかは別として、まず参看するのは唐初に成立した『毛詩正義』(毛氏注・鄭玄箋・孔穎達疏)すなわち古注と、南宋・朱熹によって撰された『詩集伝』すなわち新注であろう。

両書の共通点としては、經書解釈のためのみならず、科挙受験者用の書として広く読まれ、『毛詩正義』は『五經正義』の一、『詩集伝』は明初の『詩經大全』の主たる注釈として収められたことが指摘できる。今回論じる王安石の『三經(書・詩・周礼)義』の一つ、『詩義』も、熙寧八年(一〇七五)の成書以降、南宋にわたって科場で用いられていた。しかし、王安石が「誤国の罪人」(清・錢大昕)などと激しく断罪された中で散佚し、その經義の全貌も永らく不明であった。

一九八〇年代に入り、邱漢生『詩義鈎沉』(一九八二年)、程元敏『三經新義輯考彙評—詩經』(二〇一七年『王安石全集』に所収)などの輯佚本が出版された。また『三經義』中の『周礼義』に関しては吾妻重二先生、『書義』に関しては小島毅先生の論考があるが、王安石の『詩』解釈の真面目についてはいまだ明らかにされていない。

発表者は以前、主に『詩義』の成書の経緯を『毛詩正義』『詩集伝』のそれと比較して論じたが、今回の発表では、『詩義』の注釈そのものを古注・新注と比較する。それに加えて『詩義』の佚文を多く輯めている『毛詩李黄集解』など、南宋以降の諸書に見える王氏注に対する考察を表裏両面から分析し、『詩』解釈史における『詩義』の意義および王安石の經学思想の一端を明らかにしていく。

I—10 江右陽明學者と「石屋山人」彭簪

劉 心奕（東洋大学大学院満期退学）

江西吉水出身の江右學派の陽明學者である羅洪先は、故郷に帰った後、しばしば地方の學者・知識人たちと講學を行った。その中の一人が彭簪（成化十六年—嘉靖二十九年）である。彭簪は、衡山令を務めたことがあり、その後、一ヶ月ほど靖州知州に赴任し、官職を辞して、安福の石屋山に戻って、「石屋山人」と自称した。

彭簪の奔放で洒脱な人柄や、その學識と名聲とを慕って、多くの地方官僚や學者たちが石屋山を訪れている。羅洪先と鄒守益のような王門の高弟もまた、その例外ではなかった。

羅洪先が彭簪と交流を持ったのは、単に安福と吉水が近かったからだけではない。羅洪先は彭簪が編纂した『衡岳志』を通じて彼の名を初めて知るが、その後、友人の唐順之が彭簪を稱賛したことから、彼に一層強い好印象を抱くようになったことが大きな理由である。では、彭簪という人間の、いったいどういふ点が、多くの學者・知識人たちを魅了したのだろうか。

本発表の主役は、もとより彭簪ではあるが、彭簪本人は声高に自らの思想を語ることはない、沈黙の主役である。そのため、彼に宛てた様々な思想家たちの書簡や、彼に対する態度を通して、彼の人物像や生き方を描くことしかできない。本発表では、「山人」彭簪と彼を取り巻く思想家たちとの交流を手掛かりに、吉水・安福における講學の実態を描き出すことを通して、明代思想史の奥深さの一端に触れ、また、従来考慮されてこなかった陽明學者たちの一面を明らかにしたい。

I—11 万暦期の知識人と仏道兩教——屠隆の前半生（一五四三—一五八七）をめぐる

丁 欽馨（東北大学大学院）

浙江鄞県の人、屠隆（一五四三—一六〇五）は、すぐれた詩文・戯曲の作者であるのみならず、仏道兩教にその心魂を傾けた三教一
致論者でもある。彼の三教思想に関しては、荒木見悟先生が『明末宗教思想研究——管東溟の生涯とその思想』（一九七九）第九章にお
いて、管東溟との相異を解析しており、三浦秀一先生の『真誥』俞安期本成立の時代的情況——万暦の知識人と道教——（一九九二）は、
王世貞を中心とする女仙曇陽子信仰の文人サークルにおける、屠隆の道教受容に触れる。発表者はこうした先人の成果も踏まえつつ、
同時代知識人とのネットワークや、仏道兩教との関係に着目した屠隆思想の全貌解明を企図しているが、本発表では万暦十五年（一五
八七）を彼の三教論が一定の完成を見た年と捉えて、屠隆前半生における三教思想の形成を考察したい。

すなわち、屠隆は万暦七年（一五七九）に知友の仏教居士馮夢禎によって仏教に開眼し、その後、先述の曇陽子信仰における浄明道
の予言「竜沙の讖」受容や、道士からの道術伝授など道教の修得に努めた。同十五年に至り、道教の実践を仏教に包摂するかたちでそ
こに共通の境地を見出し、俗世間を超越するという独自の三教論を確立させたのである。

本発表では、馮夢禎や王世貞、王士性、汪道昆らと交わした書簡を資料として、右に述べたような屠隆の三教思想の形成過程をたど
り、万暦十五年における三教論と、その反響とを論ずる。屠隆は後にその三教論が反映した『曇花記』等の戯曲を撰し、また彼は同三
十三年、解脱しえなかつたという葛藤を抱きつつ逝去し、その三教論をまとまった形で残す『鴻苞』は死後の万暦三十八年に上梓され
る。今回の考察は、これら代表的な作品を分析するための前提となるのみならず、彼と交流する知識人達の思索をその人的ネットワー
クにおいて解明する。

I—12 黄遵憲の歴史観における「変易」と「進歩」——「勢」の思想として扱われるか

蘇文博（総合研究大学院大学）

歴史観は、歴史的な出来事、人物、時代、そしてそれらの関係性を理解し、解釈するための基盤となるものである。中国における歴史観は、その長い歴史と多様な思想体系を反映して、様々な視点やアプローチが存在している。清末という時期は政治的・社会的動揺の中で、従来の歴史観から脱却し、歴史を変化と進化の連続とする考え方が台頭した。その中で、特に一九世紀後半から二〇世紀初頭思想家や改革者によって提唱された龔自珍、魏源を代表とする変易史観と康有為、梁啓超を代表とする進歩史観はその主流である。本発表は清末の歴史人物である黄遵憲の歴史観における「変易」と「進歩」の再検討を目的とする一方、「勢」の思想として扱われるかを検証する。

黄遵憲（二八四八—一九〇五）は、中国の広東省嘉應州（現在の梅州市）の客家の知識人家庭に生まれた。一八七一年に日中両国の間で「日清修好条規」が締結され、黄遵憲は初代駐日公使団の参贊（書記官）として日本に派遣された。在日の四年間、黄遵憲は日本の歴史や文化、そして改革の成果を詳しく研究し、『日本雜事詩』と『日本国志』を著した。渡日前、黄遵憲は「古人豈我欺、今昔奈勢異」と嘆いた。さらに、「儒生不出門、勿論当世事」と述べ、「腐儒」を批判していた。その時の黄遵憲は歴史の流れを「古」と「今」に分けて考えていた。しかし来日後、西洋思想の影響を受けて、特に帰国後湖南で行った「南学会第一、二次講義」において、中国の社会発展を「封建・郡県・共和」の三段階に分けて説明するようになった。従来の先行研究では、黄遵憲の歴史観の変化は単線的であり、いわば「変易」から「進歩」へのアプローチとされてきたが、その変化の内因についての研究にはまだ余地が残されている。従って、本発表では黄遵憲の歴史観を捉え、歴史に内在する目に見えない「勢」の思想が黄遵憲に影響を与えたかを明らかにしたいと考えられる。

II-1 「清」でイメージされた空間とその奥底——「上巳」の詩を軸として

李 璽宇(雲南大学)

六朝時期において、文人たちに最も愛用された美辞は疑いなく、「清」である。しかし、美辞のうち、なぜ「清」が用いられたのだろうか。具体的に作品を考察すれば、上巳に関わる詩文は殆ど「清」を用いており、かなり特徴的だと言えよう。本報告は上巳の詩を軸として、晋代における「清」の使用とその起源を探究するものである。

上巳とは、初めての「巳日」を意味し、「元巳」とも呼ばれ、漢代から三月初めの「巳日」に祓禊する伝統があり、曹魏以降、上巳に代わり三月三日とされた。上巳の際、催しを行い、その場で祓禊文や賦が作られるようになった。「三月三日詩」、「上巳詩」、また東晋時代に蘭亭の集会で作られたかの有名な「蘭亭詩」もこの類に属しており、本報告においてこれらを便宜的に上巳の詩文と呼ぶこととする。

現存する上巳の儀式を描く文章の中で、最も早く作られたのは後漢・杜篤の「祓禊賦」であり、次いで張衡の「南都賦」、蔡邕の「祓禊文」、成公綏の「洛禊賦」、そして張協の「洛禊賦」はいずれも水辺で儀式を行うことを詠ったものだ。注意すべきは、上巳の詩文において、川や水を描写する詩句では、「清」「淥」など清らかなイメージを想起させる言葉が多用されることである。

なぜ川の修辭に「淥」、「清」、「素」を用いるのだろうか。上巳の詩文に登場する川はなぜ「清」や「素」でなければならないのだろうか。それについて、「清」「素」の描き出すイメージや漂わせる情緒、更に当時の宗教的な雰囲気や玄談の流行の背景などと関連すると想定される。

本報告は「上巳」の詩を軸として、「清」「素」の用い方を分析する上で、自然景物として詩に描かれる川の修辭「清」「素」の含意とその起源を明らかにしたい。そして「清」「素」が繰り返し用いられる中で、それらが如何に玄学的なコンテクストから離れて、詩文の中で一般的に用いられ、美辞として広がってゆき、当時の詩文を特徴づけたかを考察したい。

II-2 袁昂「古今書評」の方法

仲村 康太郎(京都大学大学院)

六朝から唐への書論史を紡ぐとき、従来最も重視されているのは、宋・虞蘇「論書表」から南齊・王僧虔「論書」、梁・庾肩吾「書品」、唐・李嗣真「書後品」、そして唐・張懷瓘「書斷」へと至る、品第法の展開であろう。ここでは常に張芝、鍾繇、二王父子、いわゆる「四賢」をめぐる優劣論を核とし、古質今妍の問題、天然工夫の問題が論じられてきた。特に庾肩吾「書品」は、「論書表」「論書」の流れを汲み、またその後の「書後品」、「書斷」へと受け継がれる書品論の先駆的著作であるため、六朝唐時代の書論史の展開において自ずとその中間に位置づけられる。

これに対し、「書品」と近い時期に成立した袁昂「古今書評」は、およそ「書品」とは対極に位置する。「書品」は品等により書人を序列化するが、「古今書評」は個別の批評に終始し、序列化という意識はそもそも希薄である。また書人の論評も比況法を駆使し、印象批評という向きが強い。「古今書評」は右に述べた書論史の流れからみて、やや外れた存在であるといえよう。そのためか、日本における中国書論史研究では従来本書が研究の対象となることは少なかつた。『中国書論大系』第一卷(二玄社、一九七七)に訳注が収められて以降、本書に対する理解は特に進展していないように見受けられる。

発表では、「古今書評」のもつ同時代性、措辞の新奇性、及び後代に与えた影響の三点をとりあげる。考察を通じて、書論としてのその意義を積極的に評価し、新たな見方を提示したい。

II-3 兩漢時代の紀行賦にみられる構造変化——故事と風物の關係を中心に

榊原 慎二(東北大学大学院)

『文選』卷九・十には班彪「北征賦」と班昭「東征賦」、潘岳「西征賦」を収める。これらは作者が実際に経験した旅を題材とする「紀行」の賦であるが、現存最古の作例は前漢末の劉歆「遂初賦」である。前漢末までは君主の娯樂に供される賦が中心であったのに対し、「遂初賦」のように個人の体験を述べる抒情的な賦が出現したことは、文学史における一つの画期とされる。

従来の研究においては、「北征賦」が紀行賦の確立を示す作例として評価される。しかし「遂初賦」やそれ以前に流行していた楚辞文芸との関わりをも考慮するならば、こうした理解には修正が求められるであろう。兩漢時代における紀行賦の各作例を、その構造に着目して検討していく中で浮かび上がってくるのは、この様式が後漢末の蔡邕「述行賦」に至ってようやく一応の完成をみていた可能性である。

紀行賦を構成する二大要素として、作者が通過した土地にまつわる歴史故事の列挙と風物の描写が挙げられることは、中島千秋氏や伊藤正文氏が指摘する通りである。この二要素の關係を作品全体の構成からみると、とりわけ「遂初賦」が風物の描写を後半部分に集中させている一方で、「述行賦」は両者を概ね交互に提示していることがわかる。この相違自体は先行研究において夙に指摘されているが、背景の事情には十分な説明が加えられてこなかった。

旅という体験を作中において再現する際に重要な役割を果たすのが、旅程の進行を時系列に沿って叙述する技法である。具体的には、移動を表す動詞の使用や地名の提示によって前述の二要素を結び付ける句がこれにあたる。

本発表では「遂初賦」「北征賦」「東征賦」「述行賦」の構造を比較し、旅程の進行を表す句が作品の随所に配置され、故事と風物が一つの時系列に位置づけられるようになるまでの過程を追う。そして、旅の経過を一首の作品全体に亘って叙述する紀行賦の文体が確立した経緯を明らかにしたい。

II-4 「洛陽紙貴」考——史書の編纂における修辭性について

楊 春雨(広島大学大学院)

左思の「三都賦」といえば「洛陽紙貴(洛陽の紙価を高めた)」という言葉が自然と思いきされる。しかし、『晋書』左思伝におけるこの「洛陽紙貴」の故事が、果たして西晋時代における文学テキストの伝写の実態を反映しているか否かについては、疑問が残る。つまり、西晋時代に紙が商品として流通し、売買されていたのだろうか、という疑問である。従来の研究では、当時の文学テキストの伝写について、あるいは紙の流通等について、この「洛陽紙貴」の故事を根拠に論じられることが少なくなかった。本発表では、この疑問に答えるべく、『世説新語』『集注文選』、『晋書』に先行するいくつかの晋の歴史書における左思の「三都賦」に関する文献、「紙貴」に関する様々な記録を整理し、楼蘭出土の簡牘と紙も合わせて検討する。それによって、以下の二点が指摘できそうである。

第一に、「紙貴」という表現は、最初は左思の「三都賦」ではなく、それに遅れて成立した庾闡の「揚都賦」を形容するために作られたものである。よって、「洛陽紙貴」は西晋時代の実態を反映したものではない。

第二に、漢晋時代における簡牘、紙の使用状況を焦点に絞り、それに関する記載や出土品を結び合わせてみると、西晋時代の紙は貴重な書写材料であり、皇帝からの賜与を通じてのみ入手可能であったことがわかる。また当時は簡牘から紙へと書写材料が転換する過渡期にあり、紙は一般に普及していなかったため、文学テキストが大量に伝写されることは無かった。

以上の二点に基づき、本発表では、「洛陽紙貴」という故事は信憑性に疑問が残ることを示し、また、史書の編纂における修辭性についても少し触れたい。

II-5 袁宗道の会試及び閣試の答案に対する王錫爵の評価と公安派の原点

和泉 ひとみ(関西大学)

万暦十年前後、郷試や会試において政府高官の子弟が高位で合格する事例が頻発した。張居正亡き後の万暦十四年に実施された会試では、前年の十三年に礼部の上奏に基づいて詔書が出されたこともあり、主考官を務めた王錫爵は旧弊に対処する必要があった。この変革が企図された年に会元に選出されたのが袁宗道である。袁宗道の何が会試で評価されたのか。幸いにも万暦十四年の『会試録』が残っており王錫爵の序文、及第者の答案のほか、答案に対する講評が記載されている。これらによって王錫爵がこの年の会試に期待したこと並びに試験官の袁宗道に対する評価の概要がわかる。ただ『会試録』では答案のどの部分がどのように評価されたのか、詳細まではわからない。これを補うのが『皇明館閣經世宏辭統集』巻六に収録された袁宗道の閣試の答案「法制(策)」とその眉批である。王錫爵は袁宗道のこの文を高く評価し、その文の独自性、經書に対する理解の深さと運用能力の高さ、經書や史書に裏づけられた緻密な議論、著者の魂が感じられる切実さ、文章表現の巧みさなどに賛辞を与えている。王錫爵は『会試録』の序文で当時の受験生に秀作を模擬して答案を作成する傾向があることを批判しており、そうした悪弊とは対極の傾向を持つ袁宗道の答案は正しく王錫爵が求めたものであった。また、王錫爵の『会試録』序文では「不欺」をキーワードに持論が展開され、公安派との思想上の親和性が認められる。

本発表では資料を提示しつつこうした内容を論じ、公安派の原点に新たな視座を加えることを試みたい。

II-6 貞元年間における宮廷詩会——徳宗皇帝の五言古詩創作とその意義を中心に

李 恒（神戸大学大学院）

本発表では、中唐の貞元年間の宮廷詩会の社会的意義を考え、また徳宗皇帝の五言古詩創作の美意識について主に格律を通して分析する。

貞元四年（七八八）三月から約十五年間、徳宗皇帝は、長安の宮廷において三令節に詩会を開催した。当時、朱泚の乱（七八三～七八四）によって藩鎮に対する武力討伐が放棄され、教化や礼制を通じた懐柔政策が取られはじめた。貞元八年（七九二）を境に、権徳輿が地方から中央政府に抜擢されて宮廷詩会で活躍するなど、参加者に変化が見られる。また、貞元九年（七九三）から、従前の「合宴」という形式よりも規模が縮小し、徳宗皇帝が宰相・中書省・門下省の供奉官のみとともに宴会を行い、その際に詩会も開催するようになった。

詩会に用いられる詩形は、最初の貞元四年三月の詩会で五言排律が詠じられ、また七言絶句が一度作られたのを除き、ほとんど五言古詩であった。中宗朝以降、近体詩が主流詩体として扱われていた唐代の宮廷詩会において、貞元年間の宮廷詩会は特殊な存在だと言っても過言ではない。これは、徳宗皇帝が五言古体詩を重視していたことを示す。

ただし、徳宗皇帝「五言古詩」を分析すると、体裁は単純ではない。徳宗皇帝の五言古詩においては、貞元九年から、「粘対」が順守されるようになった。これは五言古詩において、ある一聯の上句の第二字と下句の第二字とは平仄を異なるようにし（Ⅱ対）、ある一聯の下句の第二字と次の一聯の上句の第二字とは平仄を一致させる（Ⅱ粘）というものである。しかし、朝臣たちの唱和の作のなかでは必ずしも守られてはいない。

以上のように検討してゆくと、貞元年間の宮廷詩会における五言古詩の重視からは、その復古傾向、さらには娯楽目的から詩による教化への転換が見られる。いうなれば五言古詩を中心とした宮廷詩会は、詩による教化の意味あいが濃く、また「粘対」からは徳宗皇帝個人の言葉についての美意識が見いだせる。

II-7 李開先の『悼亡同情集』にみる明人亡妻哀悼の心性

野村 鮎子(奈良女子大学)

明の戯曲家李開先(一五〇二—一五六八)は、『宝剣記』(林冲故事)の作者として広く知られている。しかし、彼が亡妻や亡妾を哀悼した作品を多く創作していることはあまり知られていない。

彼は山東章丘に退居してから六年後の嘉靖二十六年、八月に元配張氏を、続いて十一月に侍妾を喪った。一連の悼亡詩や『四時悼内』と題する悼亡散曲(春一套・夏二套・秋一套・冬一套の南曲二十八支曲、北曲十支曲)には深い悼念が表れている。さらに彼は亡妻のために自ら墓誌銘や祭文、散伝を制作し、亡妾の誄にも筆を執っている。

李開先が悼亡を詠じるのに通俗的な歌曲を用いたことの意義は胡旭『悼亡詩史』(二〇一〇年)も指摘するところだが、本発表で特に注目したいのは、彼が編纂した『悼亡同情集』(以下『同情集』)である。これは、李夢陽・李舜臣・羅洪先・唐順之の亡妻墓誌銘や王慎中の存悼篇に、李開先自身の亡妻墓誌銘を附したアンソロジーである。唐順之や王慎中は李開先とともに嘉靖八才子に数えられる人物であり、しかも三人は同時期に妻を喪っている。李開先が『同情集』と題したのは、唐順之からの書簡に「喪内之情、吾三人同之」という言葉があったことに基づく。

明末清初になると、冒襄『同人集』(巻六)や屈大均『悼儷集』(佚)、尤侗『哀絃集』のように、悼亡をテーマとした唱和詩集や哀文集が登場するが、明の中期に、同時代人の亡妻哀悼文を輯めたアンソロジーが制作されていたことは刮目に値する。これは何を意味するのか。李開先の『同情集』を通じて明人亡妻哀悼の心性を探りたい。

なお、『同情集』の自序と後序は李開先『李中麓閑居集』中に見えるものの、原本は長らく所在不明であった。二十一世紀になって、その残闕本が北京図書館蔵清鈔本『四時悼内』の附録として伝存していることを卜鍵氏が発見し、これを復元したものが『李開先全集』(二〇〇四年、修訂本は二〇一四年)に収録されている。

II-8 「清溪道人」方汝浩について——『禪真逸史』をめぐる問題点

表野 和江(鶴見大学)

『禪真逸史』(全称『新鐫批評出像通俗奇俠禪真逸史』)は、巻頭「清溪道人編次／心心僊侶評訂」と題し、南北朝から初唐を時代背景に僧林澹然と門徒の活躍を描いた、八巻四十回からなる神魔小説である。テキストは、天啓年間原刊本とされる杭州爽閣主人刻本およびその覆刻本・翻刻本が、あわせて十種以上現存するほか、清末に少なくとも三度にわたって禁書となった後も改題して出版されるなど、高い人気を得ていたことが知られる。崇禎二年(一六二九)には、同じ作者による続編『禪真後史』(全称『新鐫批評出像通俗演義禪真後史』)十巻六十回も作られ、こちらは同じく杭州の書肆で、白話短編小説集『型世言』の評者・刊行者として名高い陸雲龍(一五八七—一六六六)の書坊崢霄館が刊行した。

作者の清溪道人は、序の署名「水方汝浩清溪道人」により名は方汝浩と知れ、「水」を河南洛陽の人、また浙江蘭溪一帯の人とする説があるが、生平は不明である。著に『禪真逸史』『禪真後史』のほか、戯曲・散曲の選本『纏頭百練』とその続編『纏頭百練二集』の選者であることが指摘されており、さらに崇禎八年蘇州萬卷樓刊の神魔小説『東度記』の作者「滎陽清溪道人」(滎陽は河南鄭州)も異論はあるものの一般に方汝浩とされる。

刊行者爽閣主人夏履先による「禪真逸史凡例」には、清溪道人から見せられた本書の文章が素晴らしく、そこで共に編次評訂し梓に付したとあり、これによると評訂者の「心心僊侶」は夏履先である。しかしながら夏履先の刊行書は他に知られておらず、本書の刊行についても詳しいことは全くわかっていない。

本発表では、『禪真逸史』の刊行に実は陸雲龍が関わっていたという新たな事実を指摘して、本書をめぐる従来の研究の誤りを補訂するとともに、方汝浩とその活動の実態を考察する。

II-9 隋唐『詩』学の一側面——劉迅「説詩三千言」を手掛かりとして

高崎 駿士（東北大学大学院）

隋唐『詩』学の展開について、先行研究では、唐代初期の『毛詩正義』の編纂・頒布により経義が統一されて自由な議論が停滞したが、唐代中期以降に、古文復古の言説と連関して、成伯瑜（生卒年不詳）の『毛詩指説』、施士丐（生卒年不詳）の詩説、韓愈（七六八—八二四）の「詩之序議」など、『詩』学の疑経疑伝の動きが起こったことが指摘されている。

本報告で取り上げる劉迅（生卒年不詳）は、『史通』の著者として知られる劉知幾（六六一—七二二）の息子で、中唐期の古文復興の文壇を率いた元徳秀（六九六—七五四）、李華（七一五—七七四？）、蕭穎士（七二七—七六〇）らと交流があった人物である。劉迅には「迅統詩・書・春秋・礼・楽五説」（『新唐書』卷一三二・劉迅伝）と、經典に継ごうとした著作があり、さらに、劉迅からやや時代を下り、李行修（生卒年不詳・元和四年（八〇九）の進士）の「請置詩学博士書」（『唐文粹』卷二十六上）では、当時の『詩』学衰退に言及する際に、劉迅の『詩』に関する言説を「説詩三千言」と呼び、それが当時『詩』を学ぶ人々に尊ばれていた状況を指摘して、伝統的経学の乱れとして批判の矛先を向けるほど、影響力のあった著作のようである。ただし、劉迅の著作はすでに散佚して伝わらず、その内容は、南宋・王應麟（一二三二—一二九六）の『困学紀聞』卷三によれば、楽府詩を取り上げて「雅章」と「国風」に分類したものだったという。

劉迅が「説詩三千言」を著した学術的思想的な背景と意義は、隋末の王通（五八四—六一八）の『統詩』との類似性や、古文運動の潮流との関連性、唐代楽府詩の展開などと関わり、複層性を帯びている。本報告では、先行研究を参考にしつつ、従来あまり注目されることのなかった劉迅「説詩三千言」に関わる言説の整理を通して、隋唐期の『詩』学の実態について論じる。

II-10 張恨水「平滬通車」「蜀道難」における女性と移動の表象をめぐる

神谷 まり子(日本大学)

一九三五年に近代中国初の総合旅行雑誌『旅行雜誌』に連載された張恨水「平滬通車」は、長江を列車ごと渡るフェリーの導入によって直通になったばかりの北平―上海間の旅を舞台にした小説である。寝台切符を手に入れられずにいた美しいモダンガール、柳繫春に眼をつけた金満銀行家の胡子雲が、やがて彼女に全資産を奪われて破滅するまでを描いたこのサスペンス・ミステリーは、背景に各地の名産品や居心地の良い一等車、食堂車に関する描写など、鉄道旅行の最新事情を盛り込んだものであった。作品は旅行文化の発展を目的とした雑誌のために創作された「旅行指南」の側面を持つ一方で、民国初期社会小説において見られた女詐欺師像を下地に、階級やジェンダーなどの境界を自由に横断する近代女性の表出する契機としての鉄道を描いたものだったと考えられる。

旅は有閑階級にとつてのレジャーであつただけでなく、日中戦争の本格化に伴い、わずか数年後には戦時下の避難や民族大移動を意味するようになった。このことは、同雑誌に連載された張恨水「蜀道難」(一九三九年)からうかがうことができる。単身南京を出発し、漢口から宜昌、そして重慶へと船で避難しようとする若き女性、白玉貞の三峡旅を描いたこの作品は、先々で遭遇する数々の困難と、彼女に露骨な下心を寄せる男性、馮子安に反感を抱きながらもその支援に頼らざるを得ない心境を描き出した。ともに女性の一人旅を描いた「平滬通車」と「蜀道難」は、重なり合う人物像や設定を有しながらも、後者では外界を旅の光景として眺めるまなざしと同時に、危険と混乱に満ちた戦時下にあつてそれを不謹慎と捉える正反対の視線をも伴っていたことに特徴がある。本発表では、日中戦争勃発前後において『旅行雜誌』に掲載された張恨水による二つの小説を取り上げ、女性と移動の表象が持つ意味と、それらが張恨水文学に与えた役割などについて検討する。

Ⅲ―1 義堂周信と偈頌の総集「貞和集」について

太田 亨(広島大学)

義堂周信(一三二五―一三八八)は、中世禅林を代表する禅僧である。その詩文集『空華集』・日記『空華日用工夫略集』は、義堂の思想及び当時代の禅林の様相を色濃く示しているため、研究対象として頻繁に利用・引用されている。義堂は二書の他にも偈頌の選集『新撰貞和分類古今尊宿偈頌集』(略称「新撰貞和集」)と『重刊貞和類聚祖苑聯芳集』(略称「重刊貞和集」)を編んでおり、両書はともに五山版として刊行されている。

近年、朝倉尚氏が「新撰貞和集」と「重刊貞和集」を研究対象とし、二書の詳細な書誌が明らかになった(『禅林の文学―「偈頌の総集」「詩の総集」の基礎研究』所収)。義堂は二三歳の時に既に偈頌の総集「貞和集」の原稿を草し、さらなる内容の充実を図っていた。しかし、一三七〇年頃に義堂の承諾を得ずに「新撰貞和集」が刊行されてしまう。意に沿わない点があったため、刻工者に不満を表す義堂であったが、いつか不十分な点を補完し、改めて刊行することを決意する。その意が実行されたのは、まさに死の直前であり、絶海中津に「重刊貞和集」の原稿を託して亡くなるのである。義堂はそれほどまでに「貞和集」の刊行にこだわったのである。

義堂が「新撰貞和集」の不備を歎いた点はどこにあったのであろうか。またどのような目的をもって補完を行い、「重刊貞和集」を編んだのであろうか。「新撰貞和集」には二三七〇首、「重刊貞和集」には二九九九首の偈頌が収められており、二書に重複する偈頌、どちらか一方の書にしか存在しない偈頌が存する。本発表では、「新撰貞和集」と「重刊貞和集」の比較を通じて、義堂が望んだ偈頌の総集「貞和集」について検討したい。

Ⅲ―2 『江湖集夾山鈔』所引の江西龍派「統翠抄」における「句面」と「句中」

武 清陽（京都大学大学院）

宋末元初の禅僧の詩偈選集であり、蜀僧松坡宗憩（生没年不詳）が編纂したとされる『江湖風月集』は、中国本土ではすでに亡佚したが、鎌倉時代後期の日本に伝来した後、江戸時代に至るまで禅林において広く読まれた。

室町時代中期以降、『江湖風月集』講義が盛んになり、数多くの抄物が作成された。五山僧の江西龍派（一三七五―一四四六、号統翠）の講義録もまた『江湖集鈔』（以下「統翠抄」と略称）として整理・編纂された。しかし現在、「統翠抄」全本は伝わらず、後代の注釈書に引用された部分を通じてその内容の一部を窺うほかない。現存する『江湖風月集』の抄物の中で、江西龍派の講義を最もよく伝えるもの一つに、『江湖集夾山鈔』（万治二年〔一六五九〕刊、以下『夾山抄』と略称）があり、その序文に「句中義者、盡引續翠講義」と明言する。

『夾山抄』所引の「統翠抄」には、「句面」と「句中」の語が頻繁に現れる。江西龍派は、詩偈における具体的な詩語や典故（Ⅱ「句面」と、奥深くに含まれる詩意（Ⅱ「句中」という二つの概念を明確に区別・併用しながら、詩偈を解釈したのである。同じく江西龍派の杜甫詩講義を抄出した『杜詩統翠抄』にも詩作の「底意」に関する注釈が見られるが、禅宗思想の注釈が極めて多い「統翠抄」とは異なる部分が存在すると考えられる。「句面」と「句中」は、『江湖風月集』に収録された詩偈の宗教的な要素と文学的な要素を扱うための新しい解釈方法であると言えよう。

本発表では、『夾山抄』所引の「統翠抄」における「句面」と「句中」の用例を検討した上で、禅僧の詩偈選集に対する注釈としての「統翠抄」の特徴および室町時代の抄物に現れた同様の解釈方法について論じてみたい。

Ⅲ—3 『四河入海』における林希逸『虜齋口義』の受容

瀧 康秀（清泉女学院高等学校）

南宋、林希逸による老・莊・列三子の注釈書『虜齋口義』は、我が国では五山の禅僧によつて受容が始まり、江戸期を通じて盛んに読まれたことはよく知られている。さて、その受容の初期において、五山僧は如何様にそれを受け入れていったのか。

『四河入海』は、太岳周崇（一三四五～一四二三、『翰苑遺芳』）・瑞溪周鳳（一三九一～一四七三、『脞説』）・桃源瑞仙（一四三一～一四八九、一韓智翊の聞書き『蕉雨余滴』）・万里集九（一四二八～？）『天下白』による蘇詩の講説を集めたもので、笑雲清三が天文三（一五三四）年に自説を加えて完成させた、百冊に及ぶ大著である。蘇詩は儒・釈・道の諸書に基づく表現を数多く用い、道家においてはとくに『莊子』の影響が顕著であることは周知の通りである。従つて『四河入海』では、『莊子』を中心に、道家の書に由来する表現に関する講説が多数確認されるのであり、それらを吟味することにより、五山僧が『虜齋口義』をどのように受容してきたか、ということの一端を探りたい。

大岳の『翰苑遺芳』は、王状元本不掲載の優れた注を集めることに特化しており、追隨する他の講説とは性格を異にしている。また、大岳と瑞溪では一世代の隔たりがあり、瑞溪と桃源・万里においても同様の隔りがある。そして桃源は瑞溪の講筵に参じたことがあるようで、笑雲は一韓に師事している。かかる諸講説の性格の違い、講説年代の差異や、講説者相互の関係の遠近などが、『虜齋口義』の受容においても一定の特徴を生じさせているようである。これらの点について論じたい。

また、諸講説が、郭象注・成玄英疏等、既存の注釈と『虜齋口義』とを如何に取捨選択しているかということについても言及したい。さらに、『虜齋口義』における蘇詩理解を、講説者がどのように捉えているかということについても述べてみたい。

Ⅲ—4 伊藤仁斎『春秋』觀の再考察——『春秋經伝通解』における中国『春秋』說の受容を手がかりに

于 吳甫（東京大学大学院）

『春秋經伝通解』は伊藤仁斎が儒教經典の『春秋』に『左伝』を抜粋して經文の下に配置し、晋の杜預『春秋經伝集解』と南宋の林堯叟『春秋經左氏伝句解』を経伝注の骨組みとして用いて作った未完成の注釈書である。この中で仁斎は『左伝』学の立場を保ちつつ、宋・元・明の『春秋』諸説を深く受け入れ独自の『春秋』認識を組み立てた。注目に値するのは、杜預の「義例說」の改造、及び北宋の胡安国『春秋伝』の引用という二点である。杜預は『左伝』から見た『春秋』經文の書き方（「義例」）を伝文で「凡」と書き始める。「凡例」と「故書」「書曰」「不書」などと書き始める「変例」との二種類に見分け、「凡例」を周公に、「変例」を孔子に属させたが、仁斎は元の趙沄『春秋左氏伝補注』と明の湛若水『春秋正伝』の說を受け、「凡例」を「周公の典札」から「史官の旧法」に、「変例」を「孔子の意」から「史官の意」に見直し、孔子が經文に対する「作者権」を排除し『春秋』の史書性を強く固めた。『春秋』の「原作」である『魯春秋』は孔子の前に既に「魯国の一經」として成立したと認めた仁斎は、如何にして『春秋』の經書性を史書性と両立させるかという課題に直面した結果、胡安国『春秋伝』に立脚して『左伝』を再解釈し杜預らの左氏家の注釈を取捨選択する一方、史実への「史論」として胡氏傳の經解を引用することによって、歴史記録そのものに含まれる、ある事件自体の時空を超えたより普遍的な倫理性を明らかにした。その引用書目から見れば、最古稿本、古義堂文庫所藏の「改修本」は通説の天和三年ではなく元禄年間の成立の可能性があることから、『春秋經伝通解』は仁斎の晩年の『春秋』定説と見られるであろう。また、『春秋』の「天変地異」に対し仁斎が胡氏傳の說を選別して「恐懼修省」に注目し注釈したことは、その天道觀との関わりを見過ごすべきではないと思われる。

Ⅲ—5 清儒吳英の徂徠學受容——『論語』の「舜禹之有天下」章を中心に

蔣 薰誼(東京大学)

荻生徂徠の『論語徵』が十九世紀前後に中国に伝えられた。そして、最も早くそれを利用したのが江蘇の地方知識人の吳英であった。藤塚鄰「物徂徠の論語徵と清朝の経師」(『支那学研究』第四編、一九三五)は、吳英の『有竹石軒経句説』(以下、『経句説』)と『論語徵』との関連を初めて明らかにしたが、文献学的研究にとどまり、『論語徵』の中国への影響については具体的に述べていない。その後の先行研究も藤塚論文に依拠するのみで、『経句説』の内容や徂徠と吳英の思想的な交流を本格的に分析したものは見られない。吳英と息子の吳志忠は『四書章句集注』の重要校訂本(吳氏刊本)の校訂者でもあるが、吳氏刊本の吳英が『経句説』の著者と同一人物であることはよく見落とされている。本論文では、『四書章句集注』吳氏刊本とその付録(吳氏父子の「考序」・「定本辨」及び「附考」)も視野に入れ、吳英の学問的立場を明らかにする。

また、筆者は『経句説』における『論語徵』を引用した箇所を新たに三つ発見した。本論文ではそのうちの一つ、『論語』の「舜禹之有天下」章の解釈を例に、吳英が徂徠の『論語』解釈をどのように捉えていたか、後者からいかなる影響を受けたかを説明する。

結論として、「舜禹之有天下」章への徂徠解釈は、彼の特徴的な「聖人制作説」、「道は礼楽」説、及び孟子批判を論じる重要な箇所である。吳英は徂徠独自の「道」の定義を十分に理解できなかったものの、その解釈は徂徠が開いた方向に従っていた。

吳英は、『論語徵』における「聖人制作説」や「道は礼楽」説に関する箇所注目した人物であり、徂徠の孟子批判に答えた唯一の清儒である。そのため、日本と中国の思想交流、とりわけ徂徠学の中国受容を考察する上で、吳英は見落としてはならない存在と言える。

Ⅲ―6 「徂徠山人外集」とその漢籍版本について

堀尾 裕真(名古屋大学大学院)

江戸中期の儒者、荻生徂徠(一六六六―一七二八)が中年の頃に著した『読荀子』『読韓非子』『読呂氏春秋』の三部作は、「徂徠山人外集」として写本が伝わっている。この三部作は、徂徠が多数の明代漢籍を購入したとされる宝永二年(一七〇五年)から六年(一七〇九年)に成立したもので、徂徠四十歳頃の学問的態度が窺える注釈書である。

本発表では、「徂徠山人外集」三部作の成立を概観し、徂徠が注釈する際に読んだ漢籍三種(『荀子』『韓非子』『呂氏春秋』)の版本特定を行う。これまでの徂徠研究では刊本分析が主であり、著述の書誌は先例に倣うまま検討されてこなかった。これは、著述の年代比定に各序跋や『徂徠集』所収の書簡等が必要であること、自筆本がすぐに閲覧できないこと、写本が全国に散在していること、そして河出書房新社刊『荻生徂徠全集』第三卷「解題」において、服部南郭(一六八三―一七五九)の「物夫子著述書目記」にある「右の六部は中歳の作にして、未だ成らざる者、或いは端を起して竟へざる者、必ず当に刪定を俟ちて然る後に人に視すべき者なり」との記述に従い刊本を優先する立場が示されていたためである。この三部作は注釈書であるにもかかわらず、漢籍諸版本との比較が一部に留まっていた。

書誌学的・文献学的側面からの分析は、徂徠著述の成立時期やその著述に影響を与えた文献の解明につながり、徂徠の学問的転換期や徂徠学における学問観をより鮮明に把握することが期待される。

版本の特定は以下の方法で行った。まず先行研究や目録を用いて漢籍諸版本を調査し、一覧表として整理した。次に、三部作に見られる徂徠が言及する評注者の名前や、日本における漢籍輸入状況等から該当する版本を選別した。これらの調査をもとに、徂徠以後の諸注釈書に見られる記述を参照して、徂徠が閲読した版本を特定した。

Ⅲ—7 山本北山の『尚書』学——『古文尚書勤王師』を中心に

湯 青妹(九州大学大学院)

『尚書』は五經の一つであり、儒教思想の根幹に位置する経書である。そのため、儒教文化圏に属する日本においても、『尚書』は重要な典籍と見なされ、古来、『尚書』の読解や研究がなされてきた。特に江戸時代には、日本における経書読解の水準も高まり、経学研究も大きく進展した。『尚書』研究も例外ではない。よって、これまでも、江戸時代の『尚書』学については注目されてきたが、研究対象が古学派や考証学派の『尚書』学に偏り、他の学派の『尚書』学については踏み込んだ研究がなされていない。例えば、折衷学派の山本北山(一七五二—一八二二)は、『孝経』研究で著名であるが、実は『尚書』に関する著作も残している。その中、『古文尚書勤王師』は、彼が生涯で最も心血を注いで著したものとも言われており、江戸時代の『尚書』学を理解する上で極めて重要な資料だと言える。それにも関わらず、従来、彼の『尚書』学については踏み込んだ分析がなされてこなかった。そこで本発表では、山本北山の『古文尚書勤王師』を研究対象とし、以下の点について検討を試みたい。

(1) 本書の体裁、構成、内容、及び流通状況について。(2) 本書は、孔穎達、閻若璩、毛奇齡、王鳴盛など中国の学者の学説や見解をどのように引用し、評価しているのか。(3) 本書の『尚書』研究としての特徴、独自性はどこにあるのか。

こうした『古文尚書勤王師』に関する検討を通して、山本北山の『尚書』学と中国の『尚書』学との異同、影響関係を明らかにするとともに、山本北山の『尚書』観と学問的性格を解明したい。

Ⅲ—8 江戸時代における蘇軾の史論の争い——漢文伝播の二つのメカニズムについての考察

謝 文君（北京大學中國古文獻研究中心）

江戸文人による蘇軾の史論に関する文法と思想の論争において、選本と話題の二つの漢文伝播のメカニズムは重要な役割を果たした。選本伝播とは、文章の選択を通じて規範を固定化する過程である。一六種類の日中選本の統計に基づき、江戸時代に蘇軾の史論の中で重視されて受け入れられた篇目は、「范増論」「留侯論」「伊尹論」であることがわかる。積極的に受容された例としては、中国の選本に収録された各家の「留侯論」に対する評論が、江戸文人の思考に一定の影響を与えることである。江戸文人が「留侯論」についての議論も、圯上老人の物語が写実的か象徴的かということに焦点が当てられていた。一方、消極的に受容された例としては、皆川淇園の『歐蘇文弾』である。彼の選文では『文章軌範』を底本としている可能性が高く、主に「范増論」「留侯論」などで蘇軾の文法を批判し、選本伝播の権威に挑戦する意図があると考えられる。

話題伝播とは、注目される話題に対する議論が引き起こされ、規範が改めて選択される過程である。たとえば、「伊尹論」が一六種類の日中選本で頻繁に収録されるが、江戸の文人の関心を引かなかつた。一方、江戸社会は忠孝や公私に対する関心が高かつたため、中国の選本では重視されなかつた「論武王」「論伍子胥」が江戸の文人に活発に議論されていた。さらに、この二つの史論は松崎蘭谷の『唐宋名家歴代史論奇鈔』に収録され、新たな史論の規範となり、当時の人々がこの二つの史論の文法を深く考察するという可能性を提供するかもしれない。

要するに、「伝播地域の話題」→「伝播地域の選本」→「伝播地域と受容地域の話題」→「受容地域の選本」という伝播のシステムの中で、末端の「受容地域の選本」が「伝播地域の話題と受容地域の話題」の両方から選択する必要があるため、最も複雑な情報を含んでいて、中国文学が海外で受容されるプロセスの研究課題において重要な位置を占めるはずである。

Ⅲ―9 日本近代の填詞作品にみえる「稼軒体」について

王 書凝(関西大学大学院)

森川竹礫(一八六九―一九一七)は、大正二年一〇月(一九一三)に雑誌「詩苑」を創刊し、森川の死没によって中断するまで四十八集を発行した。「詩苑」は、森川竹礫の『詞律大成』を連載するとともに「詞」欄を設け、日中の填詞作品を掲載した。そこには三十五名、二百八十一首の填詞作品があり、近代日本のこのジャンルでの創作の実態を示す貴重な資料となっている。

では、これらの填詞の諸作はどのように作られているのだろうか。今回の発表では、蘇軾とともに「蘇辛」と併称され、「豪放派」と位置づけられる、辛棄疾(稼軒)との関係に注目したい。その際重要なポイントとして、以下の四点が挙げられる。①竹礫が明・毛晋の『宋六十名家詞』によって辛稼軒の詞を集中的に読んでいること。②「詩苑」で、高野竹隱が竹礫の作を「稼軒遺響」と評し、竹隱も竹礫を「稼軒身替」と呼んでいること。③戸田静学が自作詞の詞牌の下に「效稼軒体」と注記していること。また、竹礫が静学を「宋代稼軒、清初陳髯(陳維崧)、的是夫君替身」と賞賛していること。④明治・大正期の大阪の漢詩人・画家、藤本煙津(一八三六―一九二六)は詞作をよくし、「詩苑」所載の三十七首のうちに稼軒詞とのつながりが見いだされること。とくに、煙津は詞体・詞律の面でほかの宋詞人ではなく稼軒詞に範を求めていたこと。

「稼軒体」という呼称の前身である「辛体」は、宋の岳珂『程史』(卷二)に見え、極めて早い時期から稼軒詞はそれ独自のスタイルを持つものとして意識されていた。本発表では、これら日本近代の填詞作品を読み解くことによって、日本における稼軒詞の受容のあり方を考察し、さらに日本の詞人にとっての「稼軒体」の特徴を明らかにしたい。その際には、中国詞史における「稼軒体」の評価についても考慮にいれなければならないと考える。

IV—1 望山ト筮祭禱簡の祭祀体系——包山ト筮祭禱簡と比較して

趙 珊(北海道大学大学院)

一九六五年から一九六六年にかけて、湖北省江陵県望山一号墓から、越王勾踐剣などの重要な遺物とともに、楚国におけるト筮(占い)および祭禱(儀式)の詳細を記録したト筮祭禱簡が初めて発見され、学术界に多大な影響を与えた。発掘報告書および竹簡の単行本の刊行は遅れたが、望山楚簡の学術的価値は一貫して高く評価され続けている。望山楚簡の研究は一九七〇年代末に始まり、初期の研究は主に竹簡の解釈および墓葬情報の概要に焦点を当てていた。また、墓の年代や墓主の身分に関する議論も盛んに行われた。一九九〇年代になると、包山楚簡や江陵天星觀竹簡など他の出土資料の発掘および整理が進展し、望山楚簡の解釈および整理作業に大いに寄与した。

ト筮祭禱簡の研究方法としては、一般的に包山ト筮祭禱簡が基準とされる。包山二号墓から出土したト筮祭禱簡が最も完全な形で保存されていたためである。しかし、浅原達郎氏が「望山一号墓竹簡の復原」で指摘したように、包山二号墓のト筮祭禱記録簡の体例が望山一号墓でもそのまま守られているわけではない。したがって、包山の体例のみで望山を完全に理解することはできない。

包山簡のみが完全な姿で世に現れたため、その完全性だけをもって他の不完全なト筮祭禱簡の基準とすることはできないと主張する。ただし、包山簡は他のト筮祭禱簡との比較に有効な参照物として機能することができる。本発表においては、包山ト筮祭禱簡と比較し、望山との共通点を整理した上で、異なる点を詳細に分析する。この比較分析を通じて、楚国の祭祀文化の多様性と独自性を明らかにすることが期待される。

IV-2 随州孔家坡漢簡『日書』における数術家的特徴について

何 松延(北海道大学大学院)

随州孔家坡漢簡『日書』は、二〇〇〇年頃湖北省随州一帯より出土した景帝期の漢墓の副葬品である。孔家坡『日書』の中に「歳」篇という時令説的篇章があり、その前半部分は中国地形の「西高東低」の状況を背景として、「天は西方に足らず」、「地は東方に足らず」より展開した天地秩序の再建や四時・五行の形成を語る生成論的内容である。その後半部分は前半の天地構造に基づいた一年の各月の理想的活動を述べている。「歳」篇の特徴として、四時が天地生成の最終段階に出現し、春と夏、秋と冬が互いに制約する関係にあり、四時に配当された十二支で土行に属する丑・辰・未・戌はそれぞれ冬・春・夏・秋の土として相對の季節の忌日になる。そういった四時・五行の数術的關係によって「歳」篇では特殊な時令説を設けている。

「歳」篇の内容に対して、戦国中後期に成書された楚地の長沙子彈庫帛書では天地の構造上の不足による災害と天地秩序の再建を記載しているものの、その創世から四時・五行の形成までの過程において神と伝説的人物が主導的地位にある。また『淮南子』天文訓では、「天傾地斜」の原因を共工が不周山に衝突することにあるとするが、天地の生成と四時の運行には一貫して気がかかわっているため、陰陽の気が出現し、しだいに四時の気が生み出されるという。

従って、本発表では三者の異同を比較しながら、「歳」篇の数術家的特徴を明らかにし、思想史の視点よりその世界観の形成を探りたい。

IV—3 「若魂氣則無不之也」再考——故事受容の一例として

三木 啓介(二松学舎大学大学院修了)

礼文献である『礼記』檀弓下には、春秋呉の季札が齊から帰国する道すがら長子を失い、泰山付近にあつた嬴と博の間でその遺体を葬る逸話が伝えられている。すなわち、季札は地下の泉に届かないほど浅い穴を掘り、墓も小さい薄葬をもつて長子の遺骸を埋葬し、「魂氣の若きは則ち之かざる無きなり、之かざる無きなり(若魂氣則無不之也、無不之也)」と述べ、孔子がこれを称えたという故事である。

この故事、とりわけ季札の「若魂氣則無不之也」という文言が、後代に薄葬の先例として用いられたことは、吉川忠夫に先論がある。しかし吉川氏は「中国旅行記にことよせた雑感」と本人が述べる文章であるためか、後漢期の張覇と梁鴻の用例しか論じていない。いっぽう、張承宗は吉川氏が論じた張覇と梁鴻だけでなく、その検討対象を六朝期の遺言書にまで広げ、さらに南北朝期に発生した神滅・神不滅論争に季札の言葉が引用されたことを指摘している。ただし、全体としてはあくまで用例の列挙にとどまっている印象が否めない。

本発表では、前述した先行研究の驥尾に付しつつ、六朝期において季札が発した「若魂氣則無不之」の用例とその変遷について論じる。当該期における用例を収集していくと、季札の言葉が多様に解釈されていることがわかる。例えば、前述の吉川氏は後漢期の、張氏は六朝期の遺言書における用例をそれぞれ論じたが、同じ遺言書であっても「若魂氣則無不之」の用いられかたが異なる。さらには、季札の故事の主旨から甚だしく逸脱している用例さえある。

本発表が主な検討対象とする六朝期は、相次ぐ戦乱により死が身近になり、また仏教が流行したことにより、人々が魂魄について考えることを迫られた時期である。かかる状況において、季札の「魂氣」についての文言を六朝期の人々はどのように解釈したのか。その変遷をたどることにより、典故とその受容のありかたについて、発表者なりの視座を示したい。

IV-4 明末清初に語られた宋の遺民——『宋遺民広録』の再発見と研究

顧 嘉晨（東京大学大学院）

明末清初は、いわば宋の遺民に対する「発掘」の絶頂期であった。歴史上、国が滅びるたびに遺民は昔の遺民に共鳴し、その物語に仮託して、自身の思いを語るといふ傾向が見られた。宋末—明末を俯瞰してみると、『心史』、『西台慟哭記』などの再版と共に、明の遺民の間で宋の遺民が人口に膾炙するに至り、その思想も数多く継承された。つまり、宋の遺民の存在は、後の明の遺民の思想に大きな影響を及ぼしているのである。とりわけ、宋の遺民に対する共鳴、発掘に関する代表的な動きの一つとして、主に明の遺民によって編纂された『宋遺民広録』などの遺民録が急速に普及していき、宋の遺民に関する考察、認知度が次第に高まっていった。

『宋遺民広録』は、宋遺民の事績を記録したもので、その「広」の字は明の成化十五年（一四七九）に程敏政が著した『宋遺民録』を「広める」という意味である。既に亡佚したと言われてきた『宋遺民広録』をめぐる、従来の研究では、当時の文集に散見される『宋遺民広録』の序文、書誌情報にほとんど頼っているに過ぎない。すなわち実際の『宋遺民広録』を確認していないため、その内容に関しては研究の余地が多く残されている。そのため、発表者は、各蔵書機関の目録、伝世史料文献を調べ、現地調査を行った。その結果、『宋遺民広録』鈔本の現存が判明した。しかも、その各分部がそれぞれ異なる蔵書機関に収蔵されており、少なくとも二種以上の内容が全く異なる『宋遺民広録』の存在することも確定できた。

本研究は、主に文献学的方法を通じて、日本側の静嘉堂文庫、東京大学図書館、東洋文庫、また中国側の山東省図書館、蘇州図書館、上海図書館などに所蔵される漢籍の史料調査を行った。その上で、『宋遺民広録』を中心とする明末清初における宋の遺民に対する発掘活動を勘案しながら、明末清初に語られた宋の遺民を解明する。

IV—5 劉宋の貴族制と五等爵

渡邊 義浩(早稲田大学)

西晉「儒教国家」は、曹魏末期の五等爵制の施行を契機に、皇帝との近接性を含めた国家的身分制としての貴族制を形成した。東晉もまた五等爵の賜与を続け、国家的身分制としての貴族制が形成されたが、西晉のように皇帝との近接性を爵制的秩序として表現することはなかった。それは、皇帝が自ら軍事を指揮することが少なく、また戦いが続いたことにより、五等爵が濫授されたことによる。

劉宋を建国した劉裕は、北府も西府も帝室に掌握させ、皇帝権力による軍事力の独占を目指した。また、両晉を継承して五等爵を賜与し、現在判明する限りで百四十七名が受爵している。劉宋では、原則として皇帝との近接性に基づいた賜爵が行われている。しかし、両晉のように五等爵を持つことで、六品起家し得る規定がなく、爵位を持つことにより、貴族足り得ることはない。

かつて川勝義雄は、劉裕により貴族は軍権を喪失し、それを南朝貴族制崩壊の一步と位置づけた。しかし、軍事的功績により得られる五等爵と九品中正制度との結びつきが弱くなった劉宋では、貴族の軍権の有無により、貴族制の存立は左右されない。それでは、劉宋の貴族は、何を存立基盤して貴族足り得るのであるか。また、皇帝権力は、軍事権を掌握し、五等爵と九品中正との関連性を弱体化させることにより、貴族の皇帝権力からの自律性を打破し得たのであるか。本報告は、劉宋における五等爵の貴族制との関わりの終焉を踏まえて、貴族制の劉宋でのあり方を説明するものである。

IV-6 「世界人権宣言」における良知

小島 毅(東京大学)

「世界人権宣言」は国際連合の基幹的文書のひとつで、一九四八年十二月一〇日の総会で採択された。この宣言は国際人権章典起草委員会において草案を修正しながら作成され、その委員は安保理事会常任理事国五つとオーストラリア・チリ・オランダの代表によって構成されていた。

宣言の第一条は「すべての人間は、生れながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は、理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神をもって行動しなければならない」(国連広報センターの公式訳)である。この第二文について当初案は「人間には理性(reason)がある」とだけであった。これにconscienceを追加するよう提案したのは、中華民国代表の張彭春である。彼は欧米で人権を基礎づける概念だった理性だけでは不十分で、「仁」を併記して補完することを主張し、議論の過程で良知の英訳として定着していたconscienceに代替修正する。つまり日本語訳で良心となっている語は、元来は良知であった。

中国では近年張彭春についての研究が盛んだが、そこには「世界人権宣言」に中国伝統思想の理念が含まれていることを主張したい政治的意図が窺える。こうした風潮に対して台湾の劉蔚之は、張が委員会にconscienceが世界各地に見られる普遍的思想であると力説したことを紹介し、中国での文化ナショナリズム的な解釈に異議を唱えている。

良知は『孟子』に見える語であるが、王陽明の致良知説によって重要概念となった。張が人権宣言の起草に携わっていたのは国共内戦の後半、蒋介石が敗色濃厚になりつつある時期だった。蒋介石は陽明学の信奉者として知られる。張が良知を人権の基礎概念として提唱するにあたって、このような政治情勢は関与していたのだろうか。本報告では張による委員会での意見表明の背景を分析することで、良知が条文に取り入れられたことの意義、およびそれを中国の研究者たちが評価していることの意味を考察してみたい。

II-11 「一切経音義」における「通語」

李 乃琦(名古屋大学)

『一切経音義』は現存最古の仏典音義であり、唐代の僧侶である玄奘によって、六六〇年前後に、長安で編纂された。また、七八四年(八〇七年)、僧慧琳が玄奘『一切経音義』(以下、玄奘音義と略す)に基づき、全百巻の新たな『一切経音義』(以下、慧琳音義と略す)を編纂した。両書とも当時の長安音・經典用字・流通典籍などを忠実に記録していることから、盛んに研究が行われてきた。

しかし、それでも一切経音義に登場する全ての専門用語の意味が明らかになっていないわけではない。例えば、「通語」という言葉について、はつきり注釈をせずに、曖昧に用いていることが指摘される。次に一例を挙げる。

〈蜂螿〉

舒赤反。『説文』虫行毒也。關西行此音。又呼各反、山東行此音。蛆、知列反。東西通語也。(玄奘音義卷第二)

「通語」という用語は、最初、揚雄撰『方言』に見られる。『方言』の「通語」という用語について、王力『中国語言学史』、周祖謨『方言校箋序』などは、「西漢に限定されない全地域の共通語」と論じている。玄奘音義と慧琳音義には、それぞれ計十九例と三十四例の「通語」が見られる。それらは、揚雄撰『方言』と同じく、「唐代に限定されない全地域の共通語」とも理解される。

しかし、揚雄撰『方言』に登場する「通語」について、また別の解釈が提案されてきた。そうであれば、玄奘音義と慧琳音義の「通語」にも、別の解釈が推測される。さらに、玄奘音義と慧琳音義の「通語」には、まとまった分析が存在しない。それらの意味の解明が、本研究の課題になる。

具体的には、玄奘音義と慧琳音義に見られる「通語」を検討対象とし、以下の問題を論じる。

- ① 玄奘音義と慧琳音義はいずれも唐代に編纂された。「通語」は著者の注釈か、或いは前代の文献からの引用か。
- ② 両書の「通語」は揚雄『方言』と同じく、「唐代に限定されない全地域の共通語」のことか。
- ③ もしそうでないなら、「通語」は、何を意味しているか。

II—12 江戸時代における『日本風土記』の伝写と解説——日本語語彙の漢語音訳を中心に

孫 楊洋（京都大学大学院）

『日本風土記』は万曆二〇年（一五九二）刊行の侯継高『全浙兵制考』に附載され、日本の歴史や風俗などをわたり詳しく紹介する、いわゆる倭寇史料の一つである。その中には、日本語の発音を漢字で表記する箇所が多く見られる。そして、漢字表記から帰納される字音体系が浙江の呉語に基づくことは先行研究で既に指摘されている。

しかし、中国人を読者として想定した書物にもかかわらず、江戸時代の中晩期を通じて、日本の知識人にもそれは広く読まれ、伝写を重ねていた。

注目すべきは、現存する諸抄本には、漢字音訳語の傍に、仮名で日本語の原語を書き込む箇所が多く見られることである。江戸時代の知識人は『日本風土記』に見える特徴的な音訳漢字に注目しており、それぞれの漢字表記に当たる仮名の解説も試みたことが窺える。なかでも、自ら完全な抄本を作った大田南畝は、『日本風土記』の音訳漢字を使って和歌を転写しているが、それは、その仮名と漢字の対応関係に対する自らの分析に基づいたものと考えられる。

一方、それら漢字表記に基づく中国語の原音について留意した知識人もいた。新井白石はそれが「中華正音」ではないことに早くから気付いていたが、「日本の語の訓を付候は、皆閩中の音」と判断している。

十八世紀末期に活躍した大邨詔は、抄録本の『日本風土記』に見える殆ど全ての音訳漢字に対して、それらの唐音を調べた上で、自ら校本（現東京都立図書館所蔵）を作成している。今回の調査により、大邨が注した唐音は、一部の例外はありながらも、基本的に呉語の特徴を反映する岡島冠山『唐話纂要』に由来するものが多いと考えられることが判明した。

本発表では、これら現存する諸抄本に対する調査に基づき、江戸時代において『日本風土記』が伝写された経緯とそこから窺える当時の音訳漢字に対する認識を明らかにしたいと思う。

II—13 田漢の創作理念の形成における大正文壇からの影響——初期劇作「靈光」を中心に

閻 瑜（お茶の水女子大学）

中国新劇運動の先駆者である田漢（一八九八—一九六八）は一九一六年から一九二二年にかけて日本に留学しており、この期間は日本の大正時代にあたる。留学中、田漢は多くの新聞や書籍を読み、新劇や映画を頻繁に鑑賞し、日本の文人と広く交流するとともに、新劇の創作と公演を始めた。田漢の日本留学期の経験は、その後の活動の基礎となつてゐる。しかし、田漢研究は主にその後期作品に集中しており、日本留学期の作品についての研究は特に少ない。本報告は、これまでの研究を踏まえ、先行研究ではほとんど注目されていない田漢初期の劇作「靈光」に焦点を当て、田漢が大正時代の日本文学や外国文学から受けた影響と、その影響が彼の創作理念にどのように反映されたかを検討する。

一九二〇年一〇月二〇日、田漢の新劇「靈光」が有楽座で上演された。「靈光」は三幕構成で、主人公の顧梅が夢の中で悪魔に連れ去られ、愛する人の裏切りを経験するが、最終的に神の試練を悟り、人生の使命を果たす決意をする物語である。最後に、主人公の二人は神に感謝し、悪魔の試練に打ち勝つ。

「靈光」は「ファウスト」の構造と物語を借用しており、当初は「女ファウスト (Female Faust)」と名付けられていたことから、ゲーテの『ファウスト』を意識していることが分かる。また、最後にキリストの頭上に光が差す場面から、田漢のキリスト教への関心もうかがえる。さらに、主人公のセリフには、身体の苦痛は医学で救えるが、精神的な飢餓は文学や芸術でしか救えないと述べている。これは、文学が人々に精神的救済をもたらす可能性があるというニーチェの主張に通じている。

本報告は、田漢の回想、書簡、論文と照らし合わせ、「創造社」同人の郭沫若や張資平らの同時代の作品と比較しながら、「靈光」における『ファウスト』、キリスト教やニーチェの要素を考察し、田漢の日本留学期の創作理念が大正文壇から受けた影響を明らかにする。

長い歴史を持つ武俠小説は様々な俠女像を描き出してきたにもかかわらず、武俠の世界は基本的に男性を中心に形成されてきた。男性優位な江湖で、俠女が存在すること自体、家父長制と既定の秩序に対する反抗の意味を持つと言えよう。

一九二〇年代から四〇年代にかけて起こった武俠小説ブームについて、王海林『中国武俠小説史略』は、圧迫されていた民衆が現実から救ってくれる俠客を渴望していたからであるという。そのため、男女を問わず「俠」という存在は武俠小説で勸善懲惡の機能を果たしている。しかし、王度盧が『臥虎藏龍』で描いた玉嬌龍はそのような俠客ではなかった。

『臥虎藏龍』は王度盧(一九〇九—一九七七)が一九四一年から一九四二年まで「青島新民報」で連載した小説である。江湖で有名だった青冥劍の盜難事件から始まり、劍泥棒である玉嬌龍の物語を引き出す。玉嬌龍は勸善懲惡の俠客どころか、最初から悪人として登場する。王度盧は玉嬌龍を封建の束縛から脱する勇敢な反抗者として描こうとした。俠女の身分は最初から彼女に反抗的な色彩を帯びさせたが、玉嬌龍は明らかに勸善懲惡式の既成の俠女より強い反抗精神を持っている。名劍を盗んだり人を殺したり放火したりする玉嬌龍は家父長制だけではなく、善惡の秩序にすら反抗しようとしていた。

しかし、その反抗にも限界がある。玉嬌龍は縁談から逃げて江湖を渡り歩くが、その姿はノラと似ているだろう。魯迅は家出したノラは墮落するか、家に帰るかしかないと述べているが、玉嬌龍の場合はどうなったのだろうか。彼女は自分を二回殺している。一回目、望まない結婚式の夜、玉嬌龍は死んだふりをして家出した。しかし、病気の母親を心配して家に戻ったところ、騙されて結局結婚させられてしまう。二回目は、自分のしでかした悪事が露見したために北京にいられなくなり、崖から飛び降りて死んだことになって遠くへ逃げた。しかし体が自由になっても、彼女は母親の遺言に従い、家門を汚さぬよう盜賊だった過去をもつ恋人と別れた。玉嬌龍の体は江湖を闊歩したが、精神は最後まで深窓の令嬢だったのである。家出したノラは、結局家に戻ったのだ。

王度盧が描いた玉嬌龍は、伝統的な俠女のパターンを超越して、社会秩序に反抗しようとしたが、その反抗は結局中途半端なままに終わった。本報告は、この独特な俠女に注目し、彼女の新鮮さと反抗精神の限界、また、その抵抗が徹底的にならなかった理由について王度盧の経験の面から考察する。

「大衆化」は一貫して左翼文学者の議論の中心であった。日中全面戦争の勃発により、一九三八年、中国文壇は空前の大団結を迎え、「中華全国文芸界抗敵協会」が武漢で結成し、抗戦宣伝のための大衆化をめぐる論争が行われた。一方、プロレタリア文学者鹿地亘(一九〇三—一九八二)は一九二八年日本「芸術大衆化」の主要な論者の一人で、一九三六年の初めに上海に渡り、最晩年の魯迅に親炙し、上海の左翼知識人と知り合った。一九三八年、鹿地亘は「抗日」というスローガンの求心力によって集結してきた中国の知識人たちと武漢で会合し、武漢文壇で活躍していた。その中で、「旧形式利用」「宣伝と芸術」など、「大衆化」の方法を中心に、武漢文壇の知識人たちと論争を行なった。

「大衆化」をめぐる日中左翼文学交流について、これまでの研究の多くは、「芸術運動当面の緊急問題」(一九二八)等の蔵原惟人の主張の中国側における受容を中心に、蔵原と対立した中野重治や鹿地亘の主張を批判する立場から論じてきた。そのため、一九三〇年以降日本プロレタリア文学理論の更新につれて、日中左翼知識人の理論の間に生じた「時差」が看過されてきたのではないだろうか。本発表は、一次資料を用い、戦前日中文壇における「大衆化」問題に関する討論を整理した上で、こうした「時差」を手がかりとして、鹿地亘が武漢文壇にもたらした戦前日本プロレタリア文学の「大衆化」理論の新段階と、一九三八年という時点における中国左翼知識人の「大衆化」への理解とを比較する。その上で、武漢文壇の「旧形式利用」論争を日中左翼文学交流の一交差点として位置付け、再検討する。さらに、一九三〇年左連の「大衆化」問題の提起から一九四二年「文芸講話」にかけて、「旧形式利用」論争の通時的な分析を行い、その中国文学史上の意義を再考したい。

II-16 近代日本知識人の燈謎へのまなざし——一九二〇年代を中心に

呉 修喆(九州大学)

「燈謎」は本来、宋代に起源を持つ「燈籠に掲げられた謎々を解く遊芸」を指す語であったが、清末から民国期にかけて、読書人向けに創作された「今体謎」の流行およびその批評である「謎話」の誕生によって、次第に「技巧的に優れ、精緻化した文義謎（漢字の音・形・義を利用して創作された謎）」を指す用語として定着した。

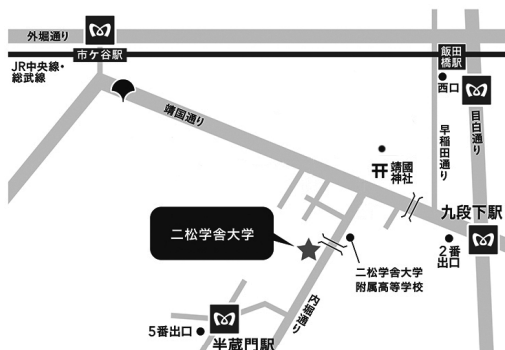
清末に刊行された毛際可『燈謎』、費源『玉荷隱語』などの今体謎集が日本でも読まれていたことは、明治期に発表された幾つかの雑誌記事によって判明した。さらに、今体謎が中国現地で流行していた様子は、清国留学生による挿絵付きの記事（蘇山人「蘇州學生年末之遊戯」『世事画報』一八九八年）で日本の読者に紹介された。のみならず、明治時代における中国語会話教科書の代表作『官話指南』（呉啓太・鄭永邦共編、一八八二年初版）第二巻第四〇章には、七題の燈謎が教材として使われている。その後、大正から昭和初期にかけて、燈謎がしばしば日本で使われる中国語教科書の中に登場した。

しかし、多くの漢学・中国学に造詣がある近代日本知識人にとって、燈謎はあくまでも漢籍または教科書でごく稀に触れる民俗文化の一種でしかなく、同時代の中国において、それが謎話で盛んに議論され、独立した文学ジャンルとして発展を遂げようとしていたことなど、知る由もなかった。一九二〇年代に入って、ようやく、中国に渡った日本の知識人たちが自ら見聞した燈謎作品とその関連現象を記録するようになる。

本発表では、一九二〇年代の見聞に基づいた関連記述を中心に、記録・例示された燈謎作品の特徴や出典などを調査するうえで、近代日本知識人が燈謎を語る際の着眼点について考察し、燈謎の近代の変容を文化交流の視点から見つめなおす。

大会会場案内図

【九段キャンパス周辺図】




※九段下駅からの道順については、下記QRコードを読み込むと、動画を御覧頂けます。



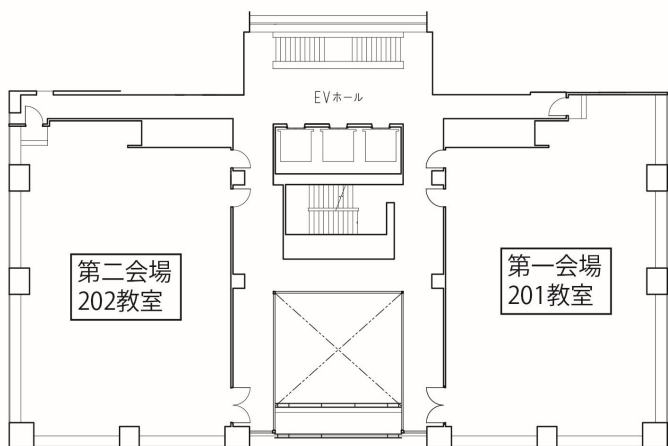
【九段キャンパス階層図】

ラウンジ (休憩室・懇親会会場)	13F
	12F
多目的トイレ	11F
	10F
	9F
	8F
	7F
多目的トイレ	6F
多目的トイレ	5F
第三会場 (401)・第四会場 (403)	4F
	3F
第一会場 (201)・第二会場 (202)	2F
多目的トイレ	1F
	1F
会場入口・受付	B 1 F
多目的トイレ	B 1 F
中洲記念講堂	B 2 F
書籍展示・クローク	B 2 F
	B 3 F

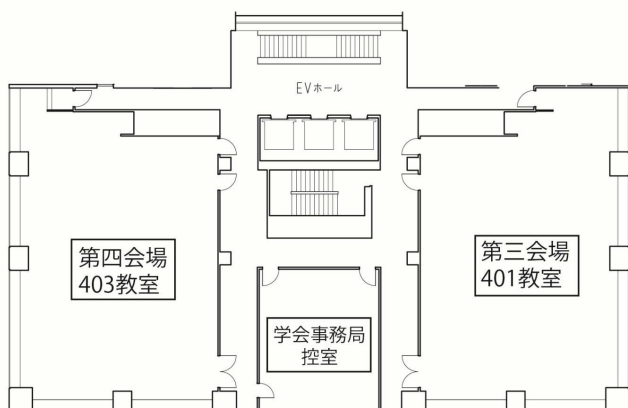
 マークは自動販売機
御手洗は各階にございます

【会場見取図】

○第一会場（201）・第二会場（202）



○第三会場（401）・第四会場（403）



託児所等についてのご案内

今大会では、設備の都合上、会場内に託児所の設置が難しい状況です。そのため今回は近隣の託児サービス等をご利用頂き、利用費の補助という形を取らせて頂きます。利用を希望される会員は下記の要領で、事前にお申し込みとご手配をお願いします。

1. 概要

・託児サービスについて

会場外の託児サービスを各会員ご自身でご手配、ご利用頂けるようご案内させていただきます。託児に係る費用は、開催校から利用料の補助金を支給致します。詳細は下記の「2. お申し込み」をご覧ください。

「たくなび」<http://www.takuji-navi.com>

(本サイトは一例です)

また、大会会場内にお子様同伴でご利用いただける休憩室を設けます。休憩室は会員外の方も利用可能です。ただし、託児所等と異なり、事故等については大会開催校は責任を負いかねます。

・託児所利用補助金

近隣の託児所をご利用頂いた場合、会員に限り、1万円を上限として補助金を支給いたします。補助を希望する場合は事前下記フォームにてお申し込みをお願い致します。

2. お申し込み

①申し込み

下記URLにアクセス頂き、フォームにてお申し込みください。大会参加費の振り込みとは別になっておりますので、ご注意ください。

【託児所利用申し込みフォーム】

GoogleフォームURL <https://forms.gle/DWwrvMM7cHcdPj9YA>

申し込み期限は、**9月27日(金)**までといたします。期限を過ぎてのお申し込みや、事前にお申し込みがない場合の利用はできかねます。ご了承ください。

②補助金支給

大会当日に受付にて補助金を支給致します。

③領収書の提出

後日領収書を大会開催校に提出ください。送付先は下記の通りです。

日本中国学会第76回大会準備会

〒102-8336

東京都千代田区三番町6-16

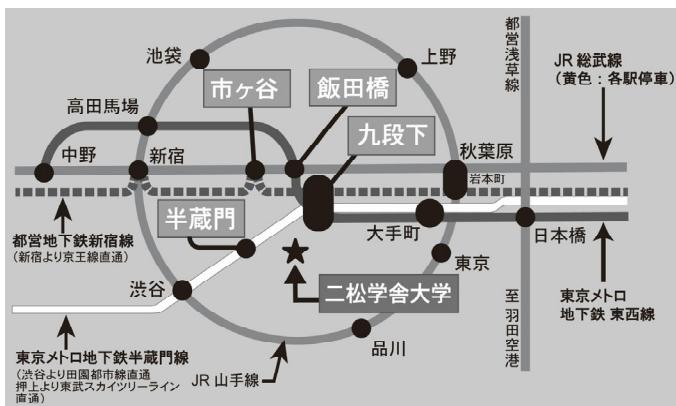
二松学舎大学文学部中国文学科

牧角悦子研究室

3. 問い合わせ先

大会準備会事務局:japansinology76@gmail.com

ご不明な点がございましたら、お気軽にお問い合わせください。



【大会会場】

二松学舎大学 九段キャンパス

【アクセス】

○東京駅からのアクセス

「東京」駅から東京メトロ「大手町」駅まで徒歩約5分

東京メトロ東西線で「九段下」駅下車（乗車約5分）

「九段下」駅2番出口から徒歩約8分

※「九段下」駅からの道のりは、本要項67頁もご参照下さい。

○新宿駅からのアクセス

「新宿」駅から都営地下鉄新宿線で「市ヶ谷」駅下車（乗車約6分）

またはJR総武線各駅停車で「市ヶ谷」駅下車（乗車約10分）

「市ヶ谷」駅から徒歩15分

※JR総武線各駅停車利用の場合、「飯田橋」駅もご利用頂けます。

「飯田橋」駅西口下車、徒歩約15分

○渋谷駅からのアクセス

「渋谷」駅から東京メトロ半蔵門線で「半蔵門」駅下車（乗車約6分）

「半蔵門」駅5番出口から徒歩約10分

〒102-8336 東京都千代田区三番町 6-16

二松学舎大学 文学部 中国文学科 牧角悦子研究室

日本中国学会第76回大会準備会

TEL・FAX 03-3261-1292

E-mail japansinology76@gmail.com
